南島原市文化財調査報告書　第11集

東大窪遺跡

― 市道古小谷線道路改良工事に伴う発掘調査 ―

２０１８

長崎県南島原市教育委員会

南島原市文化財調査報告書　第11集

東大窪遺跡

― 市道古小谷線道路改良工事に伴う発掘調査 ―

２０１８

長崎県南島原市教育委員会

発刊にあたって

本書は平成26年度に発掘調査を実施しました東大窪遺跡の調査報告書です。

南島原市は島原半島の南東に位置し，普賢岳を中心とした雲仙火山群など自然と共生する市です。

本市には原城跡や日野江城跡といった中近世の重要な史跡をはじめとして，縄文時代の土器が多く出土する深江町の権現脇遺跡など歴史遺産が多く所在します。今回発掘調査を行った東大窪遺跡では，限られた調査面積のなかでありながら，縄文時代早期の土器を中心に，石匙などの生活に関する石器など良好な資料が多数出土しました。

本書が埋蔵文化財に対する深いご理解と，今後の研究の一助に繋がれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査を実施するにあたり多大なご協力をいただきました地元の皆様ならびに関係各位，発掘作業員の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

平成30年3月31日

南島原市教育委員会

教育長　永田　良二

例　　言

1　本書は，東大窪遺跡（長崎県南島原市有家町尾上所在）の発掘調査報告書である。

2　調査は，南島原市が事業主体である市道古小谷線道路改良工事に伴って実施した。

3　調査は，長崎県南島原市教育委員会が主体となって以下の期間で実施した。
範囲確認調査　平成26年5月8日～平成26年5月22日
本　調　査　平成27年4月20日～平成27年6月23日

4　調査及び本書作成にかかわる整理調査の主体および担当は，以下のとおりである。
調査主体

南島原市教育委員会	教 育 長	定方　郁夫（～平成26年7月）
	同　　上	永田　良二（平成26年8月～）
	教育次長	渡部　　博（平成26年度～平成28年度）
	同　　上	深松　良蔵（平成29年度）
	文化財課　課長	松本　慎二
	文化財課文化財班　班長	木村　岳士

調査担当
範囲確認調査・本調査
南島原市教育委員会　文化財課文化財班　主事　大熊　玲奈
整理調査

南島原市教育委員会	文化財課文化財班	主査（学芸員）	本多　和典
	同　上	主　　事	大熊　玲奈（～平成28年度）
	同　上	文化財調査員	酒井　希望

5　調査における写真撮影は，大熊玲奈が行った。また，遺構配置図および土層実測図の作成，航空写真の撮影は，㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。また，自然科学分析は㈱古環境研究所に委託した。

6　遺物の洗浄・注記などの基礎整理は岡本美香が，拓本は池田久美子，照平八千代，溝田利枝，湯田由美が行った。遺物の実測は，上田五月，本多，大熊，酒井が行った。製図は，湯田，柿田薫が行った。遺物の写真撮影は，本多・酒井が行った。

7　本書に関する遺物，図面，写真等は，南島原市深江埋蔵文化財整理室において保管している。

8　本書の執筆・編集は，本多・酒井による。

本 文 目 次

第Ⅰ章　位置と環境（酒井）…… 1
　第1節　地理的環境 …… 1
　第2節　歴史的環境 …… 2

第Ⅱ章　調査に至る経緯と調査の経過（本多）…… 5
　第1節　範囲確認調査 …… 5
　第2節　本調査 …… 5

第Ⅲ章　本調査の成果…… 9
　第1節　基本土層（酒井） …… 9
　第2節　遺構（酒井） ……14
　第3節　出土遺物 ……17
　　1. 遺構内出土の遺物（酒井） ……17
　　2. 土坑1出土の遺物（酒井）……17
　　3. 包含層出土の土器（酒井） ……23
　　4. 石器（本多） ……31

第Ⅳ章　まとめ……36
　第1節　調査成果の分析（酒井）
　　1. 遺物の分布 ……36
　　2. 遺物の内容 ……40
　　3. まとめ ……40
　第2節　自然科学分析（株式会社　古環境研究所） ……41

挿図目次

第１図　南島原市の位置…… 1
第２図　遺跡の位置…… 2
第３図　有家町内遺跡地図…… 3
第４図　トレンチの位置…… 6
第５図　トレンチ土層実測図…… 7
第６図　本調査区の位置…… 8
第７図　Tr.3土層実測図 …… 9
第８図　1～5区西壁土層実測図……10
第９図　6～10区西壁土層実測図 ……11
第10図　11～14区西壁土層実測図……12
第11図　15～20区西壁土層実測図 …… ……13
第12図　土坑1実測図 ……14
第13図　Ⅲａ層上面遺構配置図 ……15
第14図　Ⅳａ層上面遺構配置図 ……16
第15図　遺構内出土の遺物……17
第16図　土坑1出土の遺物① ……19
第17図　土坑1出土の遺物② ……20
第18図　土坑1出土の遺物③ ……21
第19図　縄文時代早期の土器①……23
第20図　縄文時代早期の土器②……25
第21図　縄文時代後・晩期の土器①……27
第22図　縄文時代後・晩期の土器②……28
第23図　縄文時代後・晩期の土器③……29
第24図　Ⅲ層出土の石器……32
第25図　Ⅱ層出土の石器……33
第26図　その他の石器……34
第27図　遺物全体分布図……37
第28図　土器（時期別）分布図……38
第29図　石器（層位別）分布図……39

表　目　次

第１表　有家町内遺跡一覧…… 3
第２表　遺構内出土遺物観察表（土器）……22
第３表　遺構内出土遺物観察表（石器）……22
第４表　土坑1出土遺物観察表（土器） ……22
第５表　土坑1出土遺物観察表（石器） ……22
第６表　縄文時代早期土器観察表……26
第７表　縄文時代後・晩期土器観察表……30
第８表　石器観察表……35
第９表　出土遺物内訳……40
第10表　出土土器内訳……40

図版目次

図版１　航空写真……53
図版２　調査前風景……54
図版３　トレンチ掘削状況①……55
図版４　トレンチ掘削状況②・西壁土層……56
図版５　土坑1検出状況 ……57
　　遺物出土状況……57
図版６　遺物出土状況・作業風景……58
図版７　遺構・土坑1出土遺物 ……59
図版８　土坑1出土遺物 ……60
図版９　包含層出土土器①……61
図版10　包含層出土土器②……62
図版11　出土石器……63

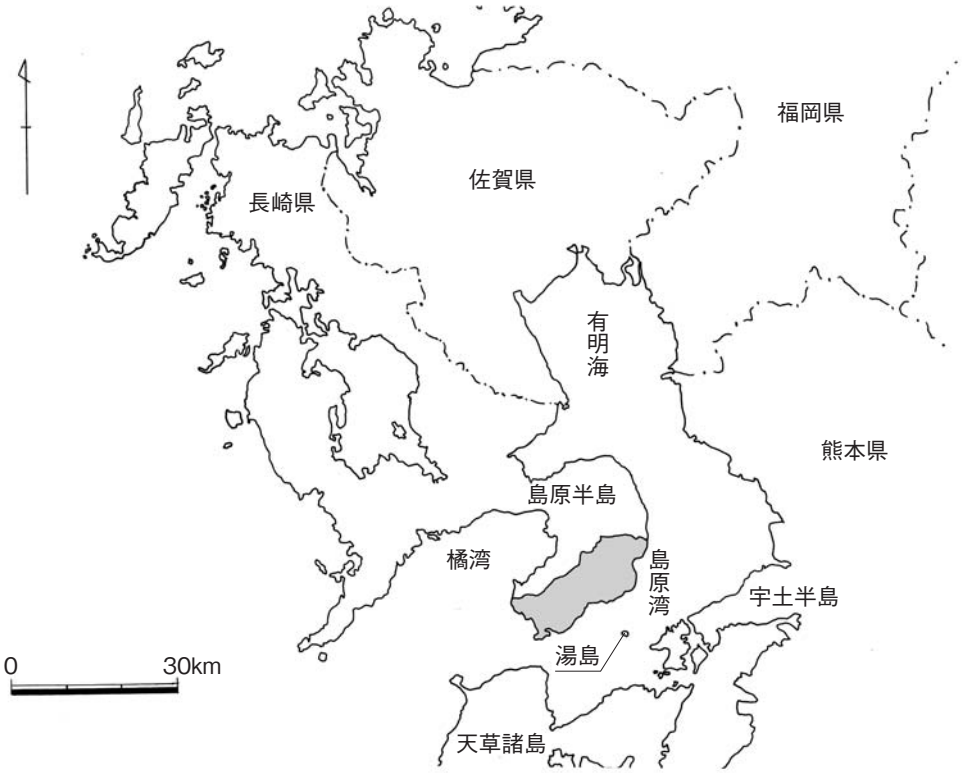
第Ⅰ章　位置と環境

第1節　地理的環境

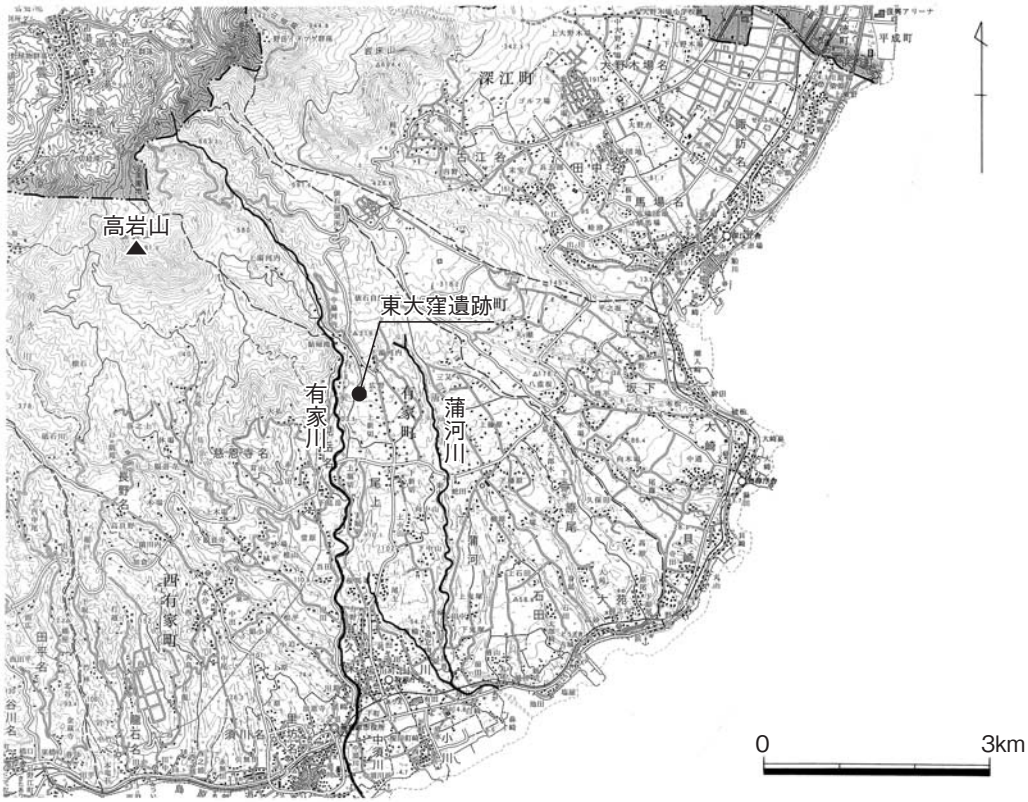
長崎県南東部に位置する島原半島は，面積467.35㎢，周囲138.3km，東西約24km，南北約32kmを測る。南西に突き出す胃袋状の地形をしており，東側を有明海（島原湾），西側を橘湾に面している。

半島の中央部には普賢岳（1,359m），野岳（1,142m），妙見岳（1,333m），眉山（818.7m）等で構成される雲仙火山が連なる。また，普賢岳の平成の噴火活動によって，普賢岳山頂部に溶岩ドームである平成新山（1,489m）が形成された。雲仙火山群の噴出物による火山麓扇状地が半島中央部から東西南北に広がり，裾野を海岸部に広げる地勢である。

遺跡の所在する南島原市は平成18年3月に加津佐町，口之津町，南有馬町，北有馬町，西有家町，有家町，布津町，深江町の8町が合併して誕生した。面積は170.11㎢，人口は46,535人（平成27年度統計）で，北西を雲仙市，北東を島原市と接している。地質は東部が新規雲仙火山，西部が古期雲仙火山と雲仙火山群の噴出物によって構成されており，地勢は主に山麓地帯と丘陵地が広がる。また，市南西部は様相が異なっており，雲仙火山より古い地層である口之津層群や第三期層の玄武岩が基盤となる。地勢は扇状地が主で，市の他地域と比べると高低差が少ないなだらかな地形を描く。



第1図　南島原市の位置（S＝1/1,200,000）



第2図　遺跡の位置（S＝1/1, 000, 000）

東大窪遺跡は南島原市有家町の標高約240～260mの扇状台地上に所在し，東西の地形が落ち込む低地部分にそれぞれ川が流れている。周辺の地形は北方にそびえる雲仙火山から島原湾に向かって広がる火山山麓地である。遺跡の所在する標高250m付近からは丘陵や台地を侵食するいくつもの河川とそれに伴う谷底低地が形成され，海岸部に向かうにつれ低地の割合がふえ扇状地や台地を形成する。

東側は全長約6, 900mの蒲河川が，西側は雲仙から島原湾に向かって全長約10, 200m の有家川が流れており，有家川は西有家町との町境となっている。また有家川上流には高さ約13m の滝がある。これは遺跡北西にある高岩山（881m）の約43万年前の溶岩でできた一枚岩によって形成されており，「鮎帰りの滝」として地元の名所のひとつとなっている。

遺跡西端部より先は山林を挟んで落ち窪んでおり，両端の低地部分は主に田畑として利用されている。東側は台地が広がり，畑や民家の並ぶ生活区域となっている。調査地点から南には有明海を挟んで熊本県の天草諸島や湯島（談合島），宇土半島を望むことができる。

第2節　歴史的環境

南島原市は，小規模な扇状地が広がる市北部，丘陵・台地が発達する市中央部，有馬川以南の山がちな市南部の3つの地形区分に大別できる。市内には現在180の遺跡が存在し，特に丘陵・台地が発達した市中央部に集中する。有家町はこの市中央部に所在し，遺跡は主に有家川及び蒲河川の河川近辺や沿岸部に集中する。ここでは，有家町に所在する遺跡を時代ごとに見ていく。

旧石器時代の遺跡は有家町内及び南島原市内では発見されていないが，遺物としては通野遺跡から他地域からの流入と考えられる三陵尖頭器が1点出土している。

第1表　有家町内遺跡一覧

1	羅漢寺跡	20	下鬼塚石棺群	39	町村遺跡
2	東大窪遺跡	21	大善寺跡	40	有家町中須川のキリシタン墓碑
3	上堀切遺跡	22	木場遺跡	41	有家セミナリオ跡
4	三又遺跡	23	山之内遺跡	42	那提大明神キリシタン墓碑
5	百貫石遺跡	24	野中遺跡	43	汐塚古墳
6	藤原・中水谷遺跡	25	北身延遺跡	44	熊野石人
7	中三条遺跡	26	通野遺跡	45	フケタ遺跡
8	妙香古墳	27	高原遺跡	46	有家町小川のキリシタン墓碑
9	長正寺跡	28	高野古墳	47	前田古墳群
10	祥岳禎公禅師碑	29	大苑遺跡	48	白崎遺跡
11	金剛院跡	30	大平古墳	49	鍛冶屋敷遺跡
12	穴ノ元遺跡	31	宮野遺跡	50	大苑城跡
13	西鬼塚石棺群	32	称名寺古墳	51	貝森遺跡
14	長田キリシタン墓碑	33	青龍寺跡	52	堂崎遺跡
15	銭谷キリシタン墓碑	34	陣之内キリシタン墓碑	53	東塩屋（旧堂崎中）遺跡
16	有家町尾上のキリシタン墓碑	35	鳥辻の保塁	54	石田遺跡
17	今城跡	36	堂崎城跡	55	蒲河遺跡
18	下鬼塚遺跡	37	堤遺跡		
19	有家町力野のキリシタン墓碑	38	馬場紀伊入道の板碑		

第3図　有家町内遺跡地図（S＝1/50,000）

縄文時代の遺跡は，山麓地付近と低地および干潟部分に集中する。有家町内では，縄文時代の遺跡が最も多く，特に晩期を主体とする遺跡が多い。主な遺跡としては，蒲河遺跡，西鬼塚支石墓・石棺群，堂崎遺跡などが上げられる。潮干帯に位置する蒲河遺跡では，少量の縄文時代晩期の土器および近世陶磁器と多量の礫器が出土している。縄文時代晩期を主体とする西鬼塚支石墓・石棺群では，支石墓と箱式石棺墓の共存が確認された。現在その一部はマリンパークありえ内に移築復元されている。堂崎遺跡からは，主に縄文時代晩期の土器と多量の礫器・石錘が出土しており，貝類の採取を主とした生産活動の場と考えられている。

弥生時代の遺跡は有家山麓地の下部付近に集中して所在する。堤遺跡からは弥生時代中・後期の合口甕棺，土器，装飾品が出土している。貝森遺跡からは弥生時代後期の土器が出土している。

古墳時代の遺跡は有家山麓地端部に多く分布する。周溝から須恵器，土師器など良好な資料が出土した大平古墳，金環が出土した称名寺古墳の他，妙香古墳，前田古墳群，汐塚古墳の5つの古墳が所在する。このうち大平古墳，称名寺古墳，前田古墳群は横穴式石室を持つ。

古代の遺跡は有家町では発見されていない。

中世の遺跡は有家山麓地端部付近に分布する。羅漢寺跡，青龍寺跡，長正寺跡，金剛院跡，大善寺跡の5つの寺院跡及び大苑城跡，堂崎城跡，今城跡の3つの城跡が所在する。

近世の遺跡は有家川扇状地に多く分布する。陣之内キリシタン墓碑，有家町尾上のキリシタン墓碑，有家町力野のキリシタン墓碑，長田キリシタン墓碑，銭谷キリシタン墓碑，有家町中須川のキリシタン墓碑，那提大明神キリシタン墓碑，有家町小川のキリシタン墓碑の8つのキリシタン墓碑が所在する。

〔参考文献〕

有家町郷土史編纂委員会　1981　『有家町郷土史』有家町
甲斐田彰編　1998「地理的環境」『蒲河遺跡』長崎県文化財調査報告書第142集　長崎県教育委員会
長岡信治　1998　『原始・古代の長崎県（通史編）』長崎県教育委員会
長崎県教育委員会編　1994　『長崎県遺跡地図』島原市・南高来郡地区　長崎県文化財調査報告書第111集　長崎県教育委員会
長崎県教育委員会編　1997　『原始・古代の長崎県　資料編Ⅱ』長崎県教育委員会
長崎県島原振興局　2015　『島原半島要覧』
福田一志・甲斐田彰編　1998　『蒲河遺跡』長崎県文化財調査報告書第142集　長崎県教育委員会
本多和典編　2007　『権現脇遺跡』南島原市文化財調査報告書第1集　南島原市教育委員会
村川逸朗編　1997　『西鬼塚支石墓・石棺群』有家町埋蔵文化財調査報告書第3集　長崎県南高来郡有家町教育委員会

第Ⅱ章　調査に至る経緯と調査の経過

第1節　範囲確認調査

平成26年度に南島原市建設課により市道古小谷線道路改良工事が計画された。工事の計画は，既存の縦走する道路を拡幅・改良するもので，南北に全長320m を測る。工事計画地が東大窪遺跡の範囲に含まれていたため，南島原市教育委員会が主体となり範囲確認調査を実施した。

範囲確認調査は，工事計画地のうち既存道路西側の拡張予定地において実施した。4m×1m のトレンチを10カ所設定し，作業は人力によって行った。各トレンチを層位ごとに掘削して遺構と遺物の有無を確認し，完掘後に壁面の土層堆積状況について実測図を作成し，写真撮影を行った。

おもにトレンチ1～5において，Ⅱ層から縄文時代後・晩期の遺物が，Ⅲ層から縄文時代早期の遺物が出土し，トレンチ1では縄文時代後・晩期のものとみられる土坑が検出された。

以上のことから，トレンチ1～5を含む計画路線の北半分については，本調査が必要と判断した。

第2節　本調査

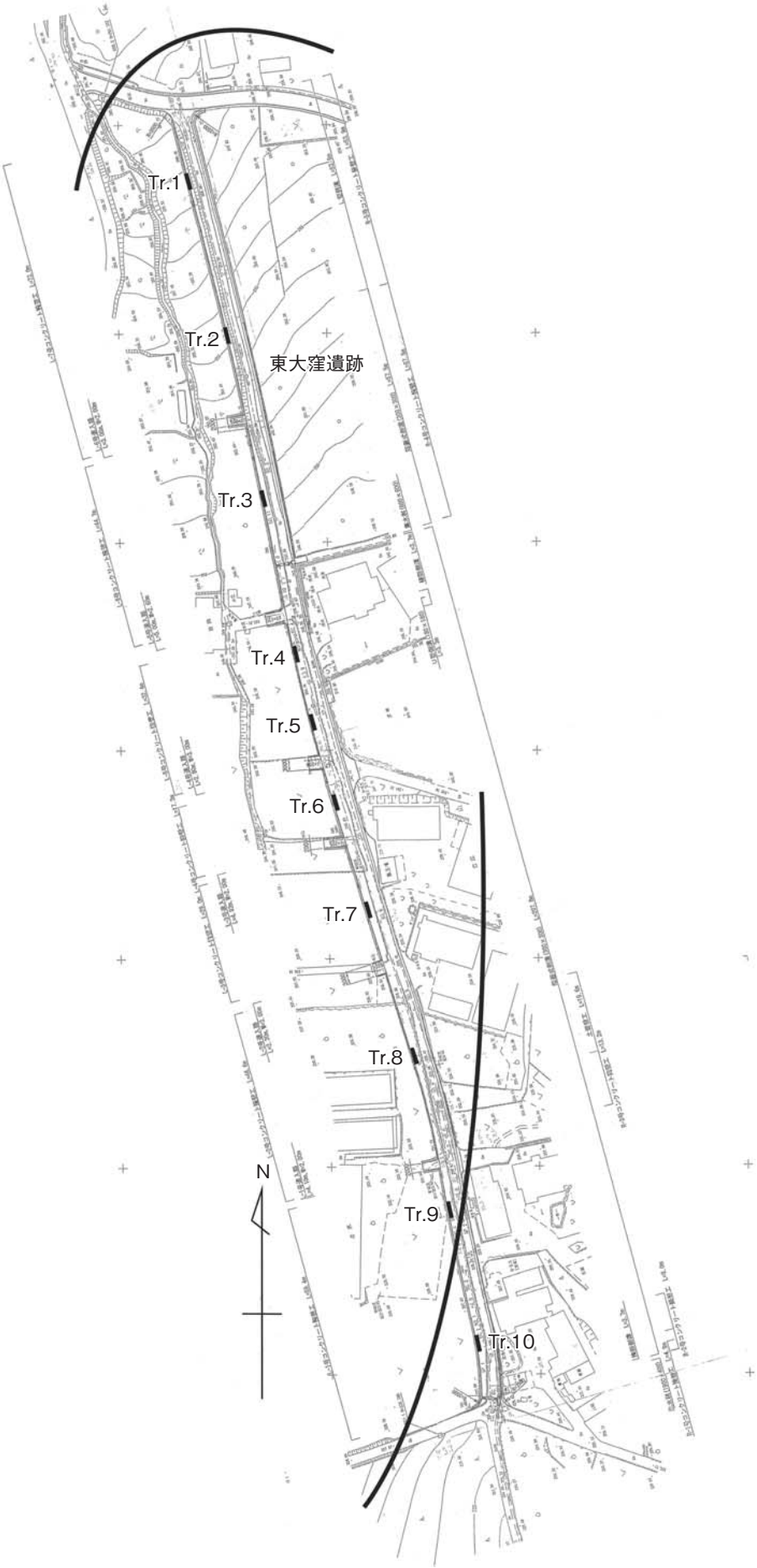
範囲確認調査の結果に基づき，平成27年度に全体の工事計画地のうち路線計画の北側およそ半分の部分について本調査を実施した。本調査の面積は，358㎡である。本調査対象地の調査前の状況は，竹林，果樹園，畑地であった。

本調査にあたっては，まず竹林の伐採を実施し，調査区の設定を行うとともに廃土置場の確保を図った。その後，バックホーによって遺物包含層の上面まで表土剥ぎを行った。表土剥ぎ後は，調査区全体を8m 間隔で北から南へと区切っていき，1から20までの小区画を設定した。以上の作業にあたっては，市建設課の全面的な協力を得た。

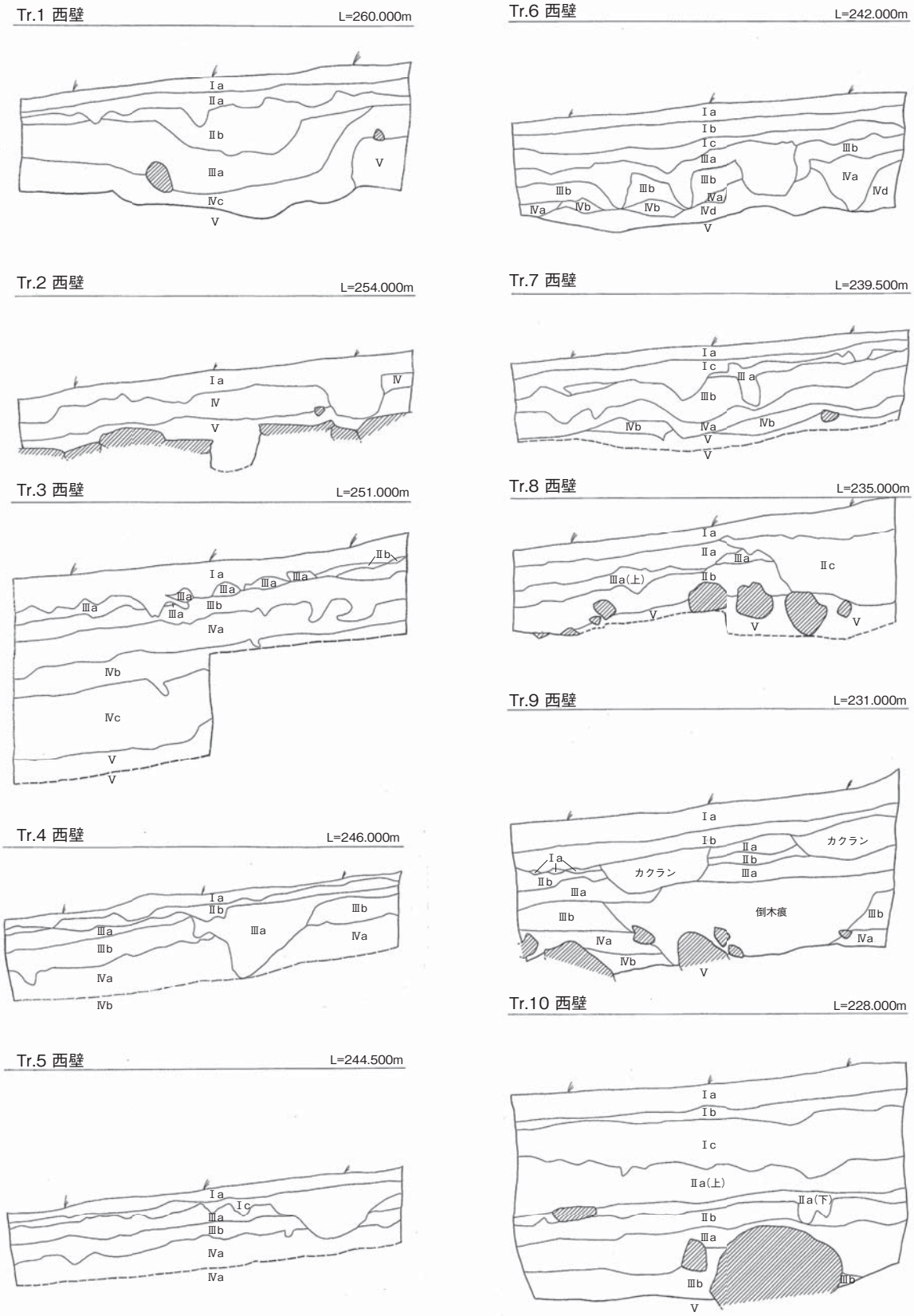
掘削調査にあたっては，小区画ごと，層位ごとに遺構と遺物を検出しながら進めた。

出土遺物については，座標観測によって出土地点の記録を行った上で取り上げ作業を行い，遺物分布図を作成した。遺構については，Ⅲ層上面及びⅣ層上面の各面において検出・掘削作業を行い，遺構配置図を作成した。調査区の西壁及び各小区画の北壁については，土層実測図を作成して堆積状況を記録した。また，作業状況や遺構・遺物の検出状況について，随時写真撮影による記録を行った。完掘した段階でラジコンヘリによる航空写真の撮影も実施した。

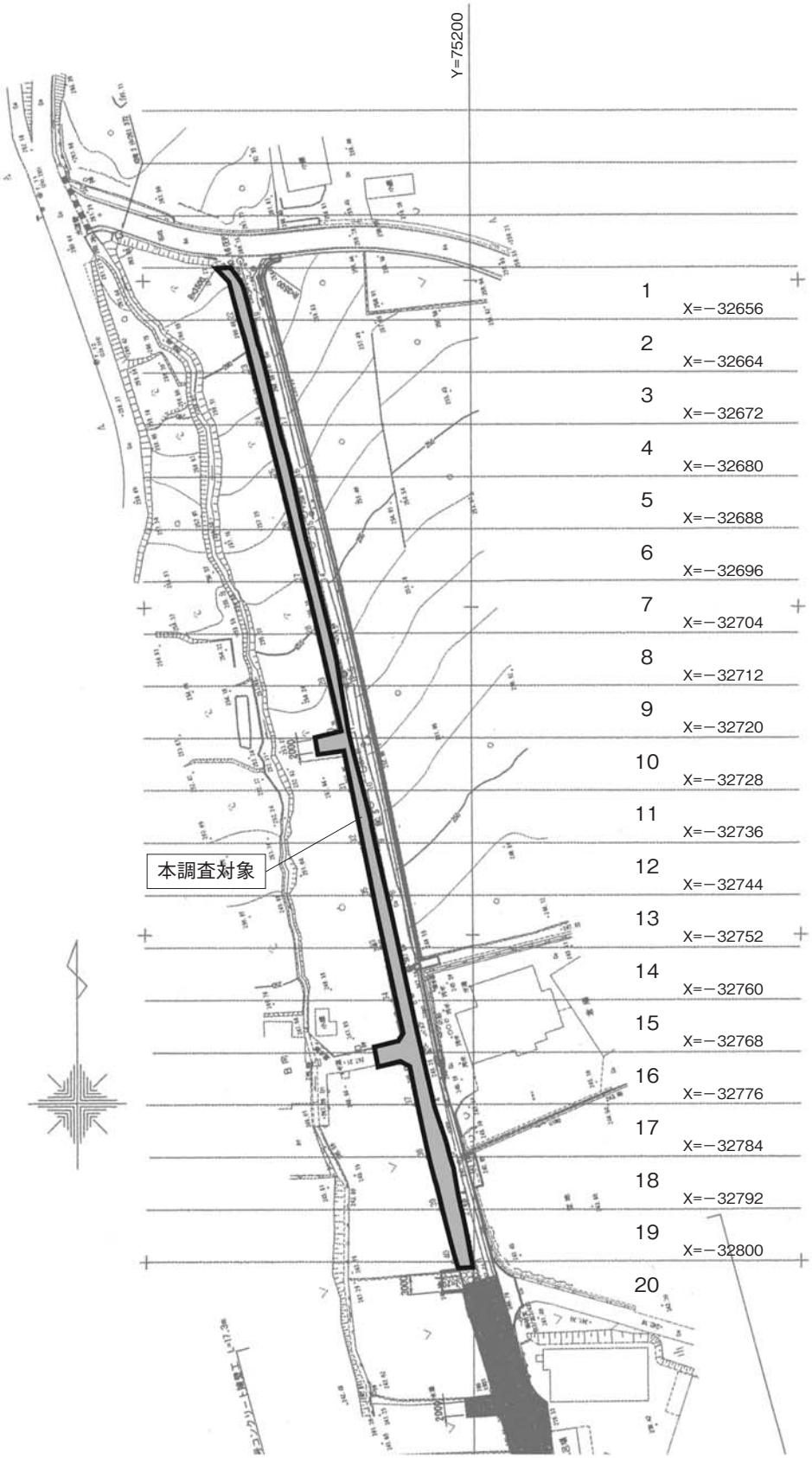
本調査の完了後は，道路工事の着工がすぐに控えていたため，埋めもどし作業は行わずに事業主体者への現地引き渡しを行った。



第4図　トレンチの位置（S＝1/1,500）



第5図　トレンチ土層実測図（S＝1/60）



第6図　本調査区の配置図（S＝1/1,000）

第Ⅲ章　本調査の成果

第1節　基本土層

東大窪遺跡の基本層序は以下の通りである。

Ⅰａ層　暗灰黄色土。耕作土。

Ⅰｂ層　暗灰黄色土。造成土。

Ⅰｃ層　Ⅱ層土・Ⅲ層土からなる造成土。

Ⅱａ層　黒色土。縄文後期～晩期の遺物包含層。

Ⅱｂ層　オリーブ黒色土。縄文時代後期～晩期の遺物包含層。

Ⅲａ層　明黄褐色土。縄文時代早期の遺物包含層。

Ⅲｂ層　黄褐色土。縄文時代早期の遺物包含層。

Ⅳａ層　黒褐色土。

Ⅳｂ層　黒褐色土。Ⅴ層土をブロック状に含む。

Ⅳｃ層　暗灰黄色～黄褐色土。

Ⅳｄ層　黒褐色土。

Ⅴａ層　明黄褐色土。粘性が非常に強く砂粒を多く含む。

Ⅴｂ層　黄褐色土。砂粒を多く含む。

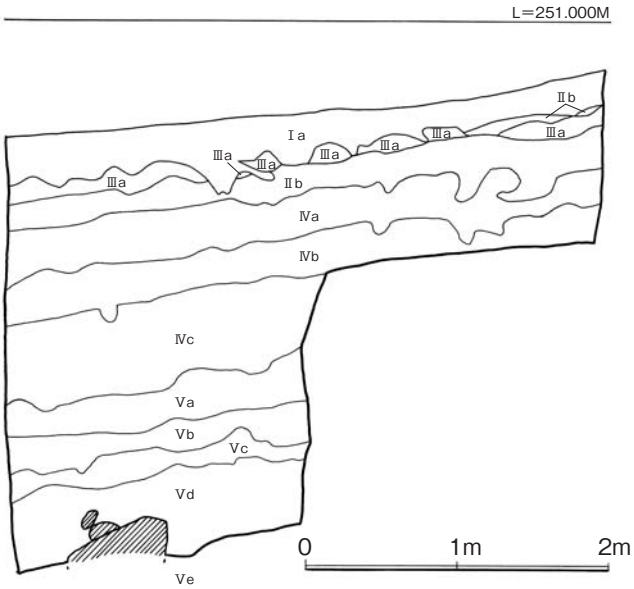
Ⅴｃ層　明黄褐色土。

Ⅴｄ層　橙色土。30～50㎝のデイサイトを多量に含む。

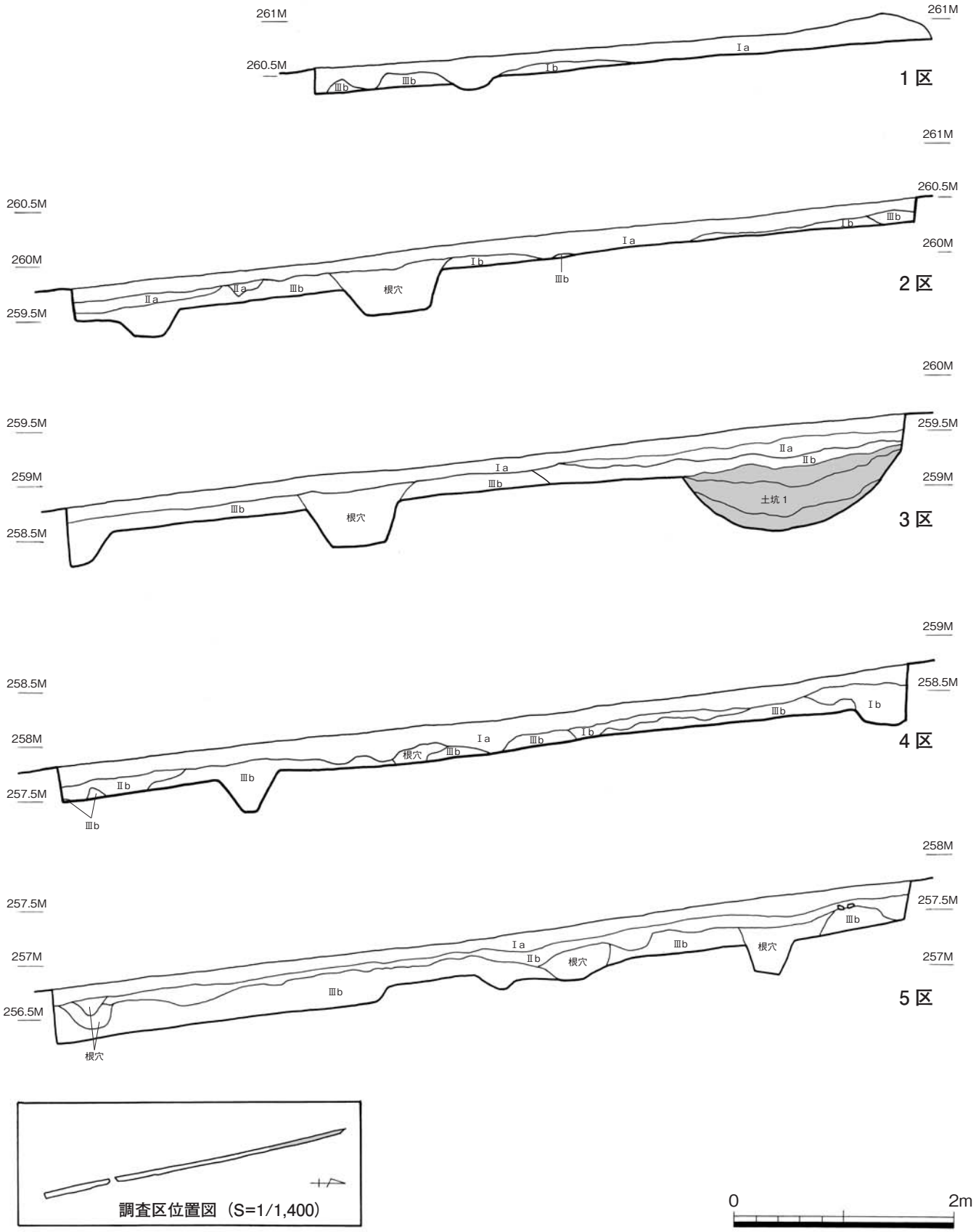
Ⅴｅ層　明黄褐色土。粘性が非常に強く30～50cm のデイサイトを多量に含む。

層位は範囲確認調査で見られた基本層序をおおむね踏襲する。なおⅣ層以下は試掘調査におけるトレンチ3～トレンチ5をさらに掘り下げ検出した。調査区は北から南に向かって大きく傾斜しており，北端と南端である1区と20区の高低差は約20mである。

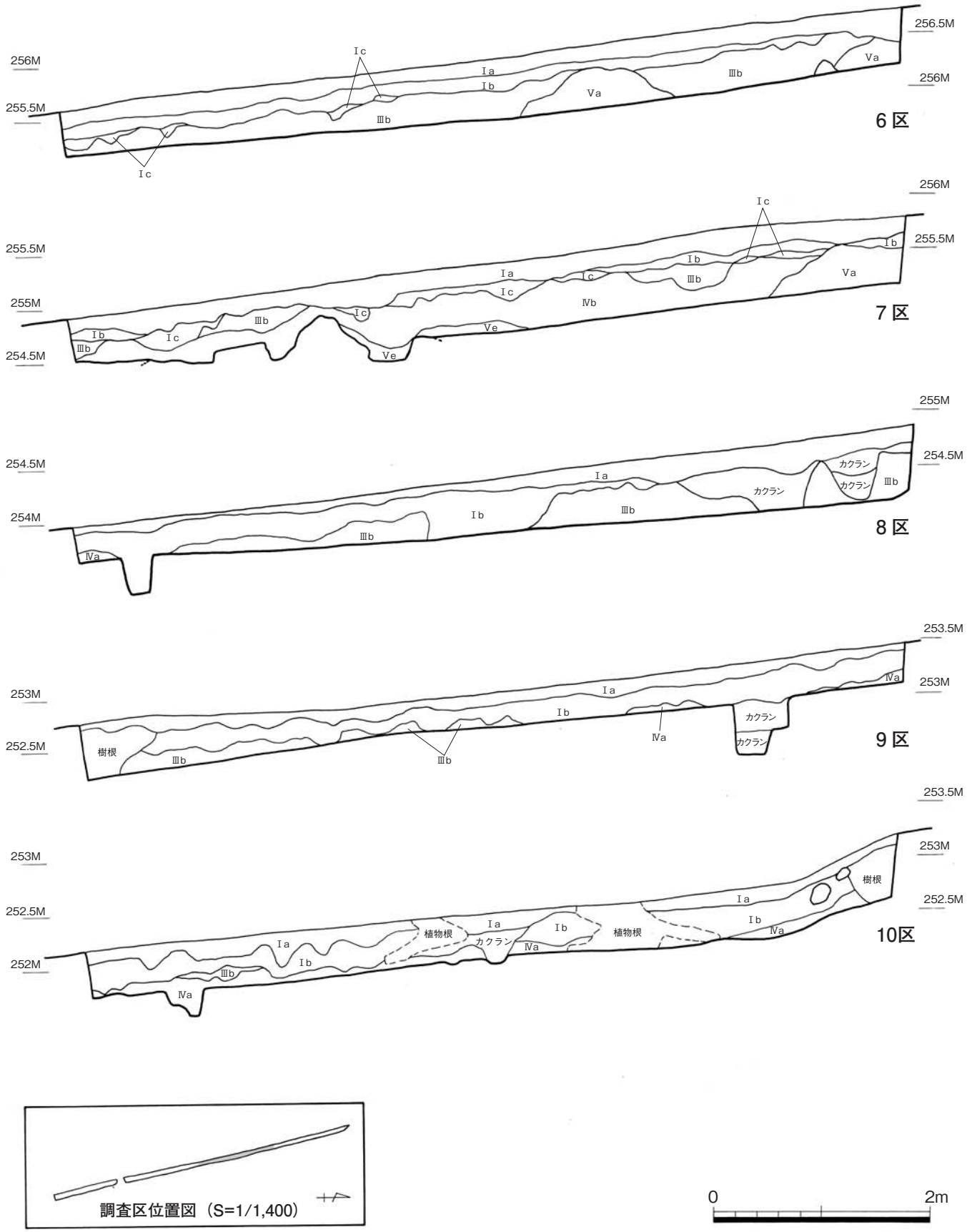
遺物包含層は前述のとおりⅡ層およびⅢ層で，Ⅱ層は天城式を主体とする縄文時代後・晩期の包含層，Ⅲ層は塞ノ神式土器を主体とする縄文時代早期の包含層である。Ⅱ層は現代の掘りこみによる消失が目立ち，調査区北側のごく一部にのみ残存する。Ⅲ層は調査区ほぼ全域で検出され，南側11区からは層位が安定し，遺物の出土も多く見られた。



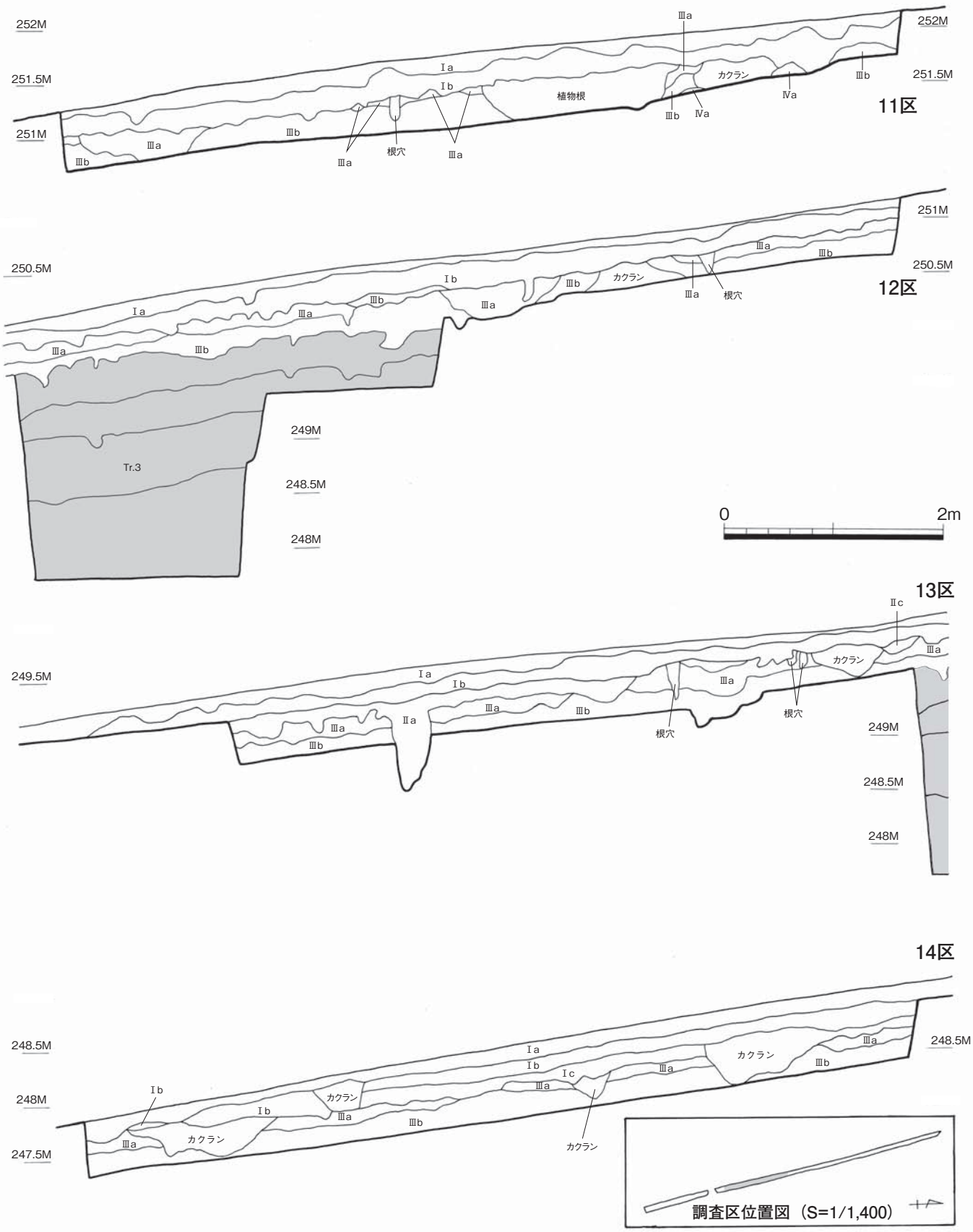
第7図　Tr.3土層実測図　(S＝1/50)



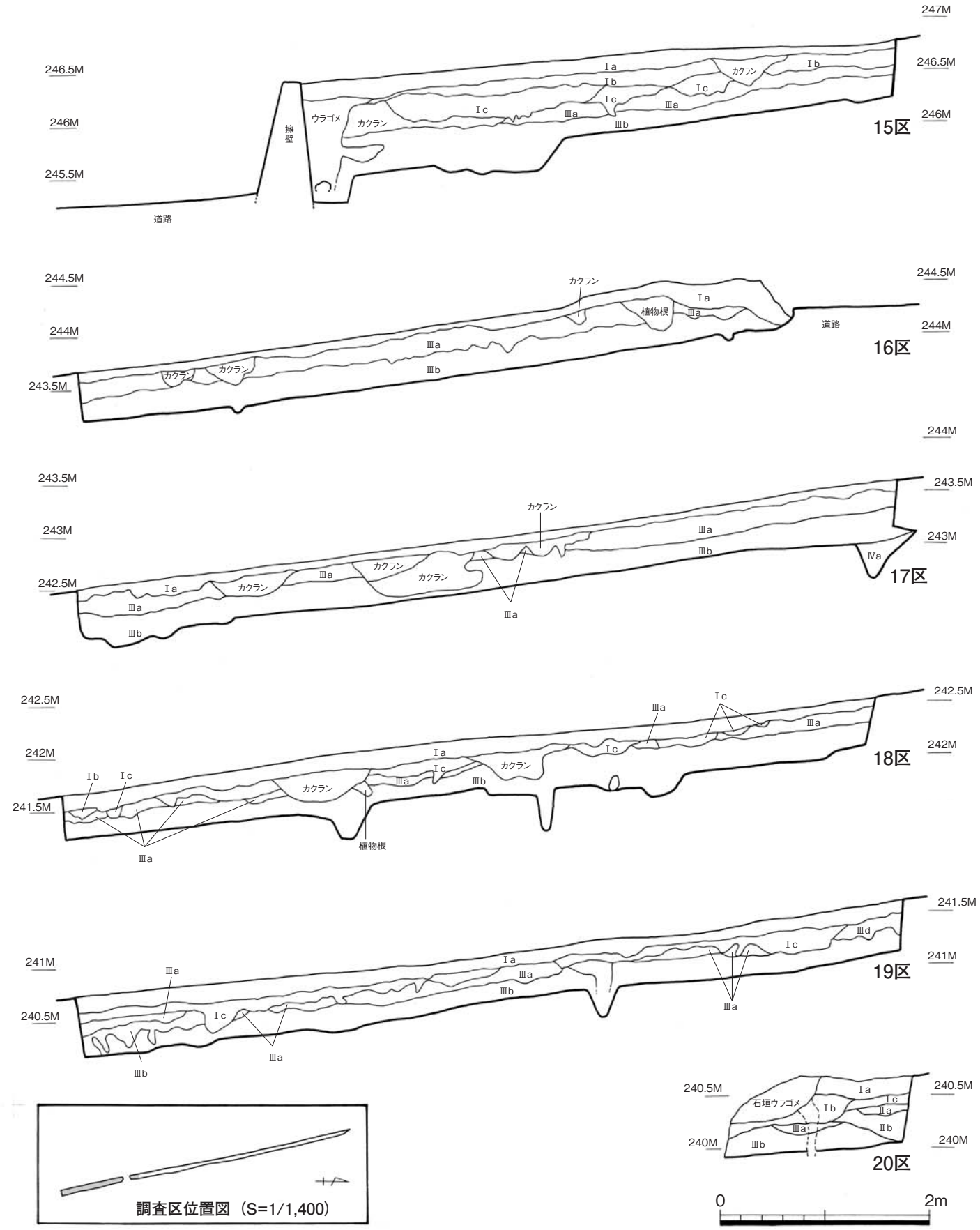
第8図　1～5区西壁土層実測図（S＝1/50）



第9図　6～10区西壁土層実測図（S＝1/50）



第10図　11～14区西壁土層実測図（S＝1/50）



第11図　15～20区西壁土層実測図（S＝1/50）

第2節　遺構

今回の調査ではⅢａ層上面とⅣａ層上面で遺構を確認できた。

1. Ⅲａ層上面遺構群

1～10区まで竹林となっており，調査区北側では竹の根穴や植物，樹木の根穴を多く検出した。

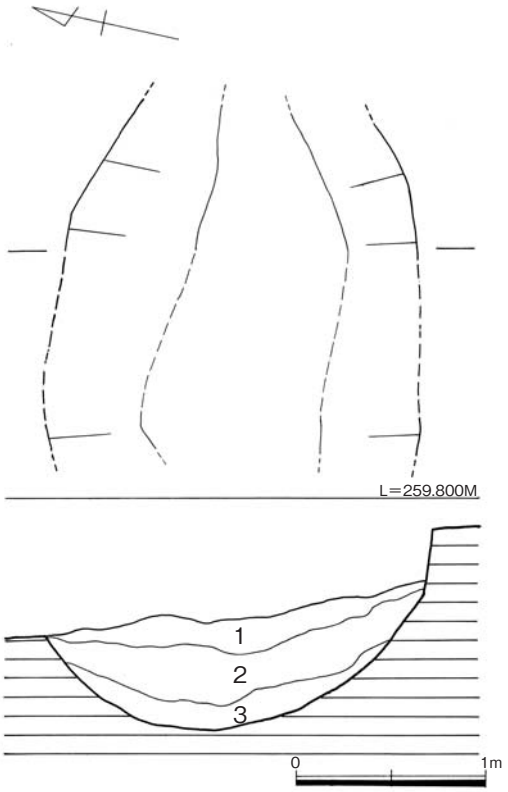
遺物を伴う遺構はごくわずかであったが，後述する土坑1からは縄文時代後期・晩期土器が多く出土した。14～20区までは農地として利用されており，現在も耕作が行われているため，現代の掘りこみによる撹乱が多く見られた。

2. Ⅳａ層上面検出遺構群

Ⅲａ層と同じく1～10区までは植物の根穴による層位の撹乱が激しく，ピットは検出されなかった。11区より南側では，14・15区と18区において遺物を伴うピットがまとまって検出された。出土遺物の大半が図化するに至らない細片であったが，文様をもつ土器口縁部や石匙などの資料も数点確認できた。

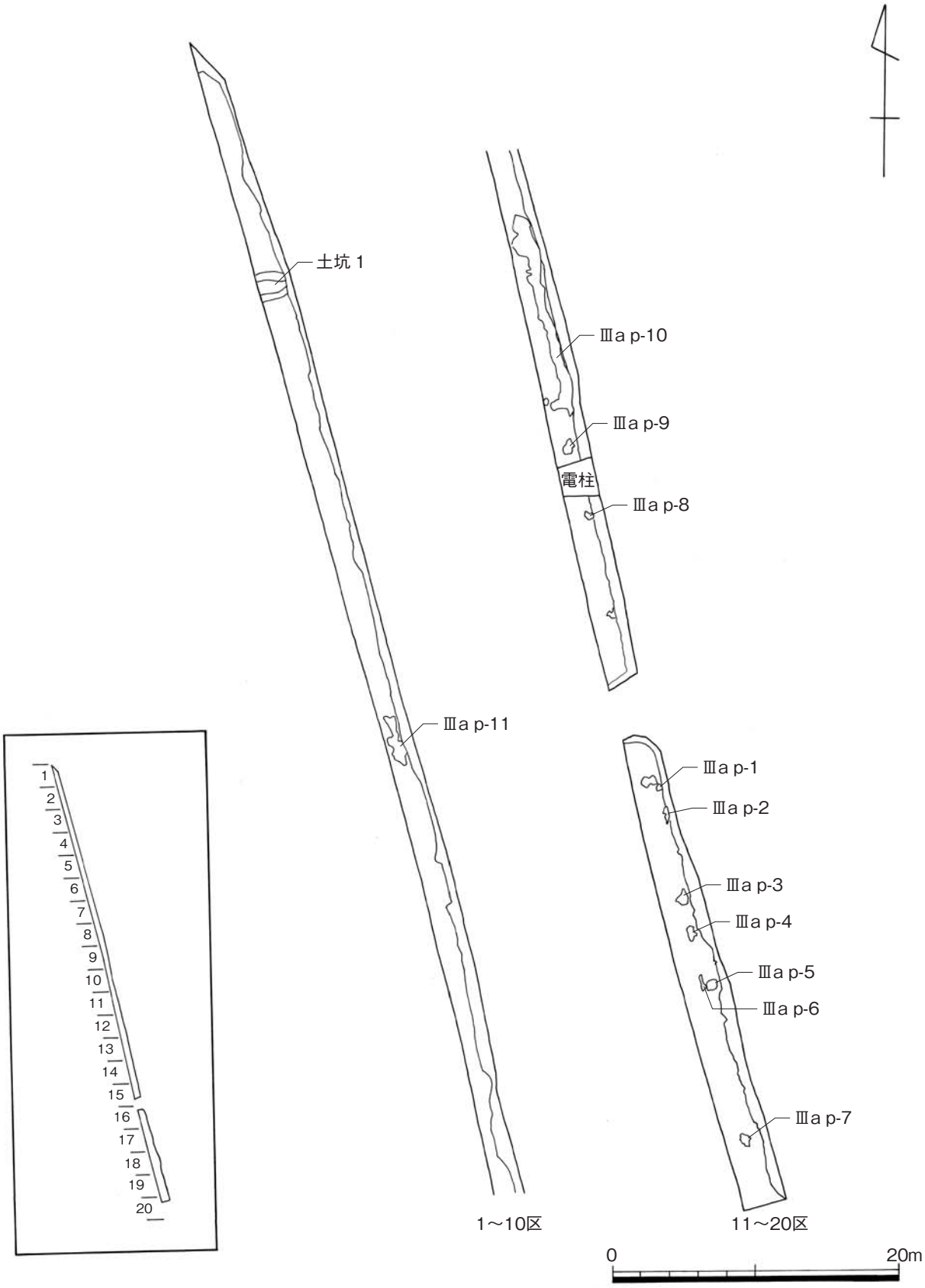
3. 土坑1

3区のⅢａ層上面で検出した土坑である。南北幅2m，東西は検出幅で1.8mを測り，高さは約80cmである。現在は東側が道路となっており，また西側は調査区外であったため，全体像は不明だが，元は東西を長軸とする楕円状であったと推測できる。遺物は縄文時代後期・晩期の土器片が多く出土し，細片ではあるものの，接合資料が多かった。このことから当時の廃棄土坑として使用されていたと考えられる。埋土である2層・3層では約2㎜の炭化物の混入が確認できたため，それぞれの層からサンプル2（資料No.4）・サンプル3（資料No.5）を採取し，放射性炭素年代測定を行った。

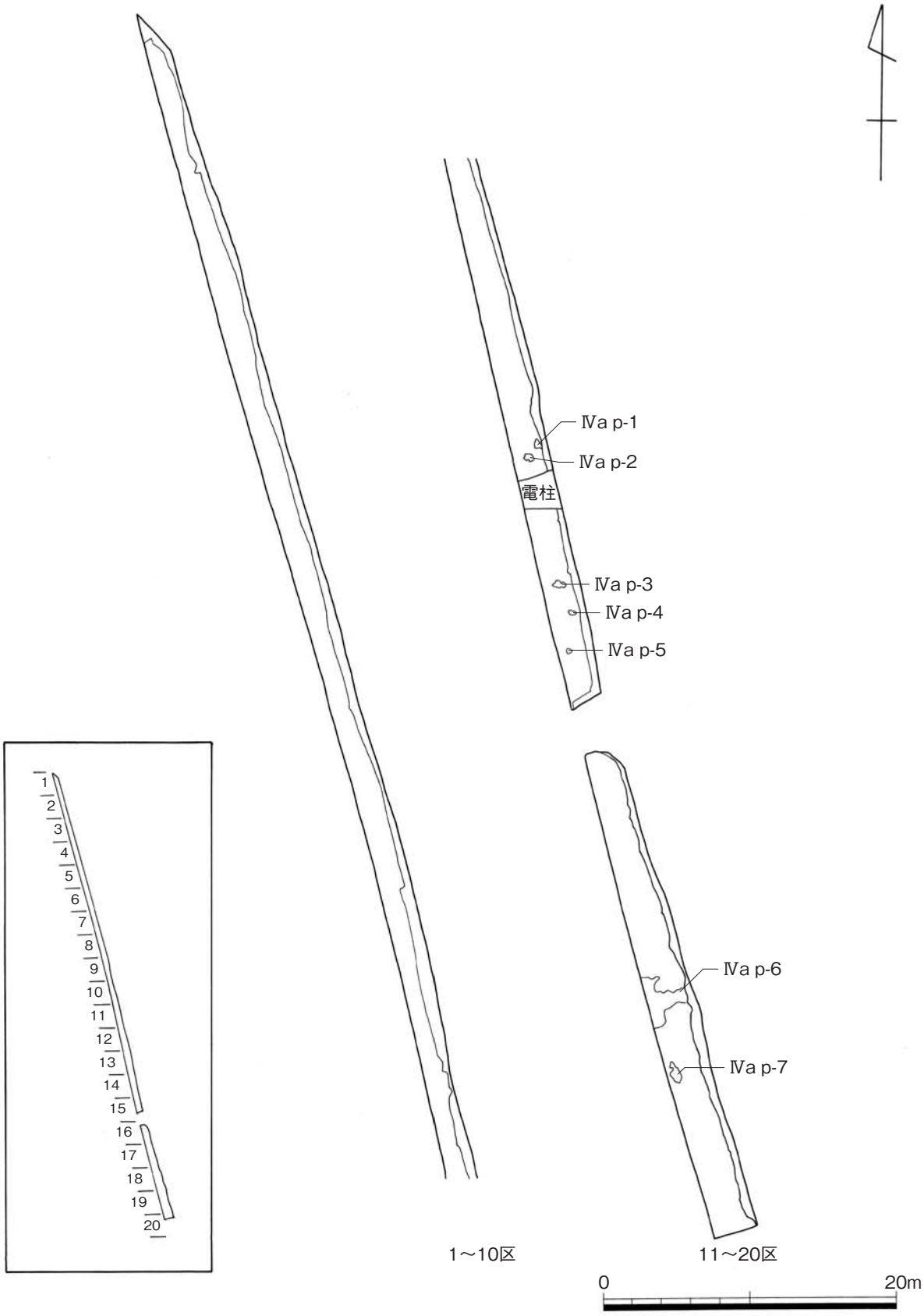


1層：褐色土（Hue10YR4/6）暗褐色土や褐灰色土がまだらに混ざる。
2層：黄褐色土（Hue10YR5/8）2mm大の炭化物を多く含む。
3層：黄褐色土（Hue10YR5/6）黒褐色の砂粒を少量含む。2mm大の炭化物を少量含む。

第12図　土坑1実測図（S＝1/40）



第13図　Ⅲ a 層上面遺構配置図（S＝1/400）



第14図　Ⅳ a 層上面遺構配置図（S＝1/400）

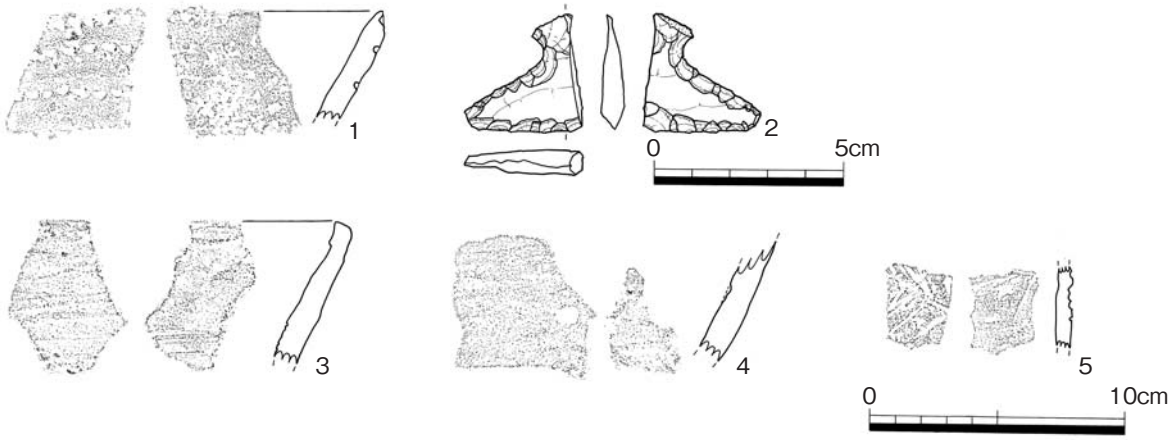
第3節　出土遺物

1. 遺構内出土の遺物（第15図）

1～2はⅣａ層上面検出遺構の遺物である。**1**は口縁部資料で，楕円状の刺突列点を4段並べる。口唇部断面はすぼまる形を呈する。内外面ともにナデ調整を施す。

2は一部欠損するが，比較的小型の石匙である。サヌカイトの剥片を素材としており，つまみ部には自然面を残す。表裏面両方からの剥離により，直線的な刃部を作り出す。

3～5はⅢａ層上面検出遺構の遺物である。**3**は縄文時代早期の土器で，口唇部上端を平坦に整える。調整は内外面ともに貝殻条痕の後にナデを施す。**4**は無文の胴部資料である。胎土に小礫が混ざる。粗いナデ調整が施される。**5**は沈線で区画を作り，その内部を撚糸文で満たす。器壁はやや薄く，内外面ともにナデ調整を施す。



第15図　遺構内出土の遺物（1・3～5：S＝1/3，2：S＝1/2）

2. 土坑1出土の遺物（第16図～第18図）

第16図と第17図は深鉢形土器の資料である。

1～5は口縁部資料である。**1～4**は数条の沈線もしくは凹線を施す。**1**と**2**は同一個体の土器であると考えられる。口縁部がやや内側に屈曲し，外面に2本の凹線を施す。口唇部は平坦に整えられ，内外面ともにナデ調整である。**3**は短く口縁部がほぼ垂直に立ち上がり，2本の凹線を施す。調整はナデで，屈曲部外面にわずかに稜線ができる。**4**は幅のせまい3本の沈線が施され，口唇部は平坦に整えられる。内外面ともに丁寧なナデ調整がみられる。**5**は口縁部が外反し胴部にくびれをつくる形になると思われる。口唇部はゆるやかな平坦で，調整はどちらもナデである。

6～23は胴部資料である。

6～13は胴部で「く」の字に屈曲する形を呈する。**6**は胴部で内側に向かってゆるやかに屈曲する。内外面ともに貝殻条痕後にナデ調整を行い，外面にはさらに研磨を施す。**7**は屈曲後の反りがやや強く，大きくくびれをつくる。外面には稜線をつくる。調整は内外面ともに工具によるナデの後に研磨が施される。**8**は屈曲部がわずかに厚みを持ち，内外面ともに横ナデで調整した後に外面には縦方向のナデも加えている。**9**はやや強く屈曲し，屈曲部直上には1本の凹線を施す。内外面ともに貝殻条痕

を施し，外面のみナデで仕上げる。**10**は屈曲部直上に2mm 幅の沈線を施す。調整は内外面ともに研磨で，器壁が薄く焼成は良好である。**11**は**9**・**10**と同じく屈曲部に沈線を施す。外面は丁寧な研磨が施され，内面はやや粗雑なナデ調整である。**12**はわずかに外側に反る形を呈することから，屈曲部上部の土器片だと考えられる。内外面ともに研磨が施される。**13**は外面に貝殻条痕を多く残し，内面には炭化物が付着する。**14**は外面全体に貝殻条痕が残り，内面には炭化物が塊となって付着する。この炭化物は放射性炭素年代測定を行った（資料 No. 2）。**15**は外面に縦方向のナデが施され，内面には炭化物が付着する。**16**は器壁が薄く，焼成が良好である。内外面ともに研磨が施される。**17**は外面に横方向の研磨の後，縦方向の研磨を施す。内面は黒褐色を呈し，研磨による調整を施す。**18**は全体的に粗雑なつくりで，胎土には小礫が混入する。調整は内外面ともに貝殻条痕で，外面には何度か縦方向に雑に研磨を施した形跡がある。**19**は外面に横方向のナデを施した後，縦方向に軽く研磨を行う。**20**は外面に縦方向の研磨を施し，内面も同じくナデで仕上げる。内面にはわずかに炭化物が付着する。また下部割れ口にも炭化物が付着する。**21**は器壁が厚く，焼成が良好である。外面は全体に炭化物が付着し，調整は内外面ともにナデである。**22**は下部に厚みがある底部付近の土器片である。焼成は良好で，内外面ともに研磨を施す。**23**も同じく底部付近であると考えられ，外面は縦方向のナデ調整，内面には幅の狭い工具でなでたような形跡がある。

24〜**26**は底部資料である。**24**は復元底径11. 0cm を測る。わずかに底があがる。**25**は復元底径7. 0cm を測る。底部に胴部からの粘土紐をかぶせるため，わずかに段ができる。**26**は底径計測不可。粘土紐部分できれいに割れる資料である。胎土に小礫が多く混ざり，圧痕が目立つ。

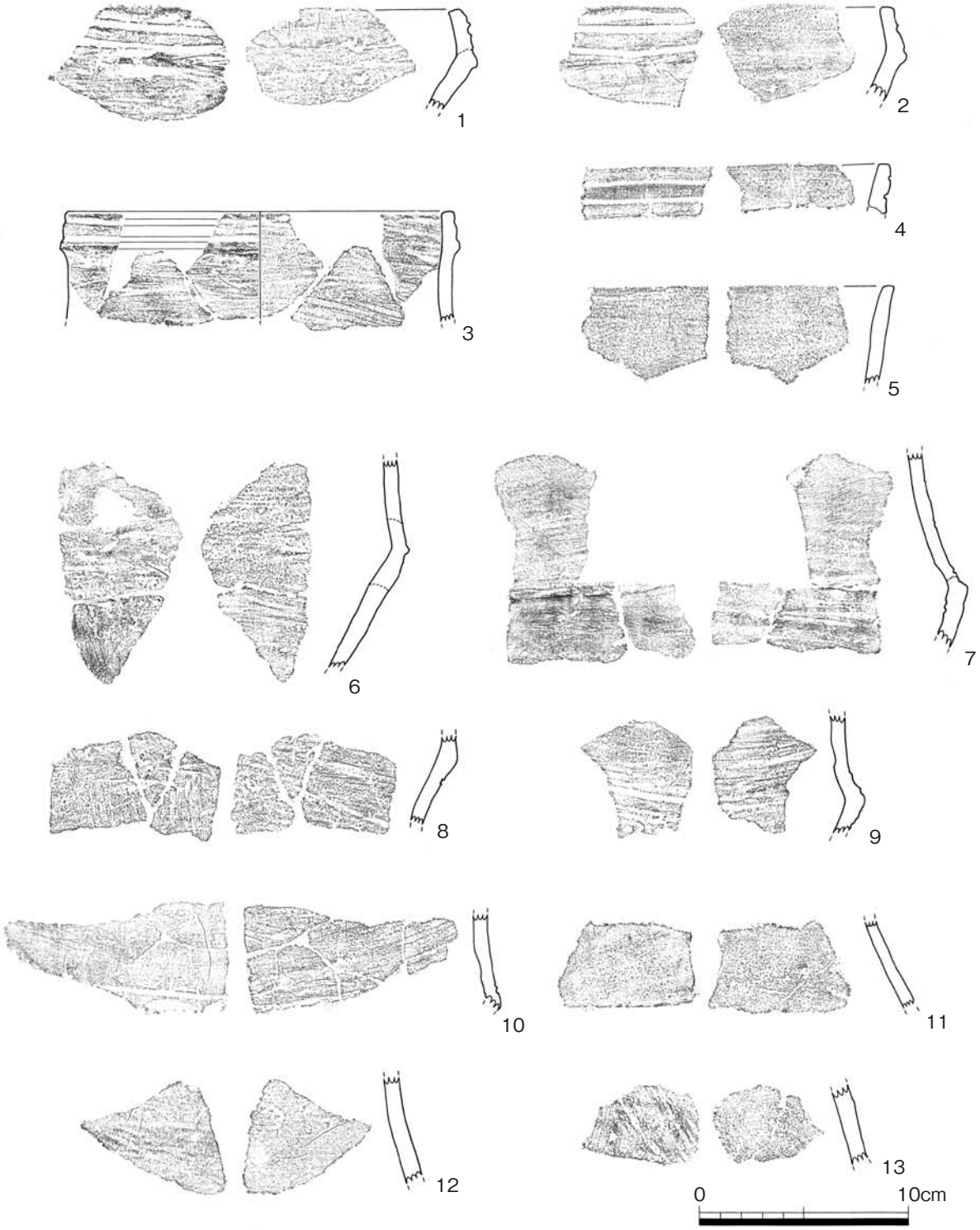
第18図は浅鉢形土器および石器の資料である。

27は口縁部が立ち上がり，頸部で短くくびれをつくったあと，肩部で張り出す。口縁部には2本の凹線を施す。屈曲部上部には3mm 幅の凹線を引き，頸部と胴部の間に境界を設ける。調整は内外面ともに研磨である。なお，外面には炭化物が付着していたため，放射性炭素年代測定を行った（資料 No. 1）。**28**は口縁部が短くはっきりと立ち上がり，胴部は直線的に底部につながる。口縁部には2本の沈線が施され，口唇部は平たく形成される。調整は内外面ともに研磨である。**29**はごく浅い椀形の土器である。口唇部は平たく，調整は内外面ともに，貝殻条痕の後にナデ調整を施す。**30**は椀形を呈する。器壁は薄く，調整は内外面ともに研磨である。**31**は口唇部は平坦で，横方向の研磨，さらに外面は縦方向にも研磨を施している。

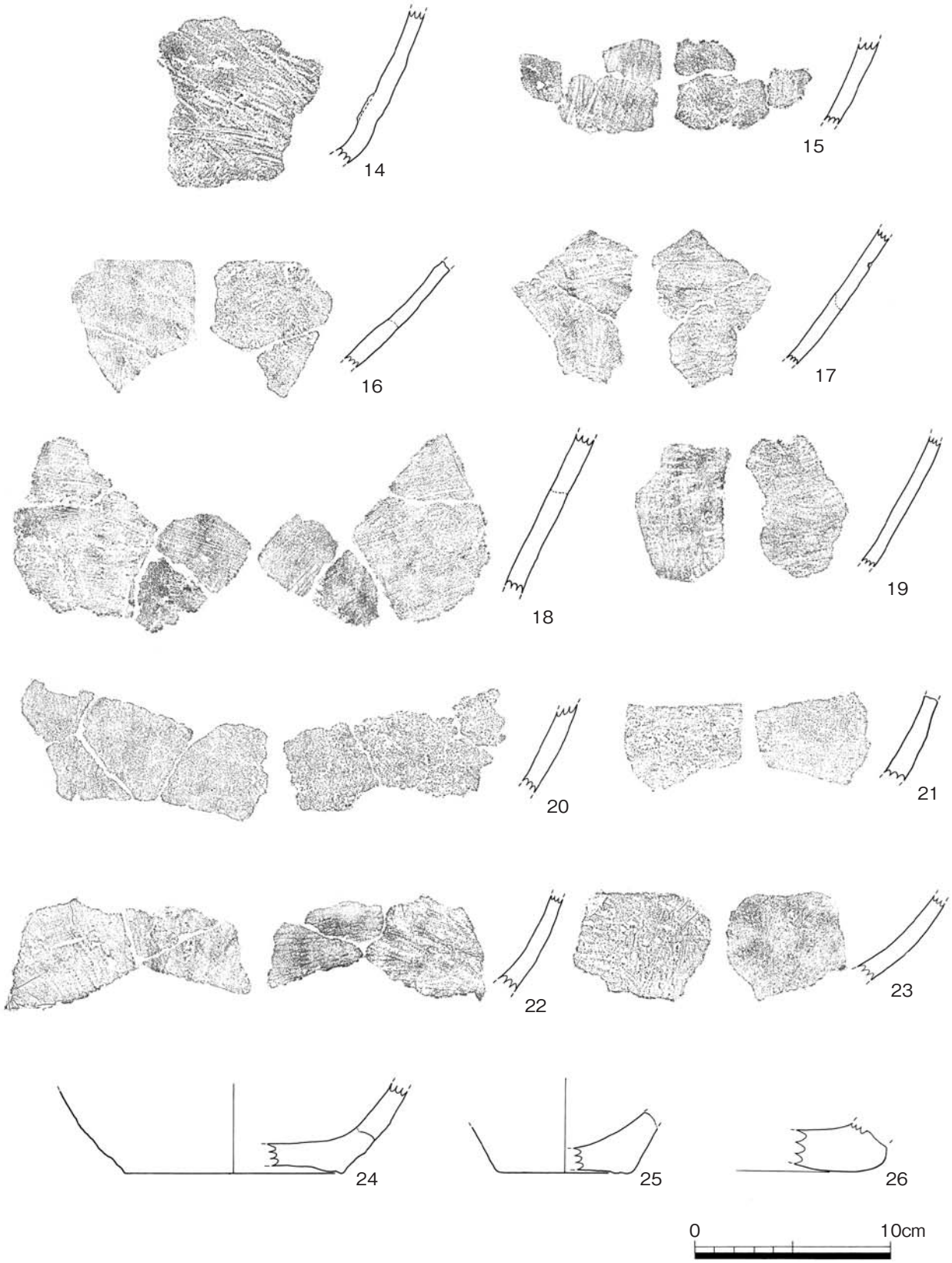
32・**33**は石器である。

32は安山岩製の磨製石斧である。基部は欠損するが，撥形を呈し，刃部は弧状をなす。刃部及び表裏面はよく磨いているが，両側縁は整形時の剥離を残す。

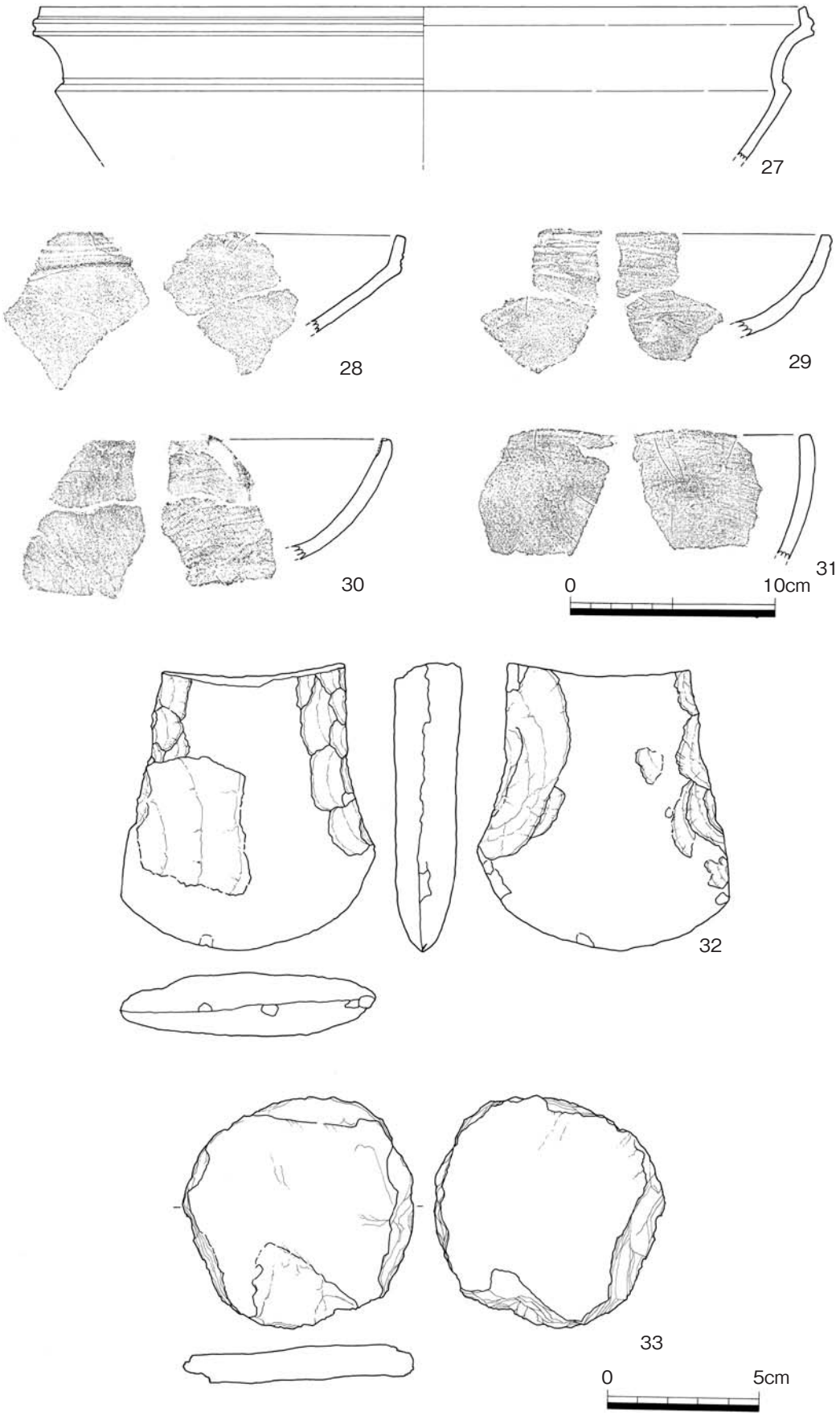
33は結晶片岩製の円盤状石器である。直径約7. 6cm を測る。周縁を打ち欠いて円形に整える。



第16図　土坑1出土の遺物①（S＝1/3）



第17図　土坑1出土の遺物②（S＝1/3）



第18図　土抗1出土の遺物③（27～31：S＝1/3，32・33：S＝1/2）

第2表　遺構内出土遺物観察表（土器）

図	番号	ピット番号	調査区	文様・調整		色調		焼成	胎土	備考
				外面	内面	外面	内面			
15	1	Ⅳa p-2	13区	ナデ	ナデ	黄灰色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・赤色粒子	
	3	Ⅲa p-10	11区	ナデ・貝殻条痕	ナデ・貝殻条痕	橙色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・小礫	
	4	Ⅲa p-10	11区	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・小礫	
	5	Ⅲa p-10	11区	ナデ	ナデ	明赤褐色	橙色	良	角閃石・長石・石英	

第3表　遺構内出土遺物観察表（石器）

図	番号	ピット番号	調査区	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）
15	2	Ⅳa p-4	13区	サヌカイト	3.1	3.1	0.7	4.8

第4表　土坑1出土遺物観察表（土器）

図	番号	文様・調整		色調		焼成	胎土	備考
		外面	内面	外面	内面			
16	1	ナデ	ナデ	明赤褐色・黒褐色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英	2と同一個体
	2	ナデ	ナデ	明赤褐色・黒褐色	にぶい赤褐色	良	角閃石・長石・石英	1と同一個体
	3	ナデ	ナデ	灰褐色・黒褐色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英	炭化物付着
	4	ナデ	ナデ	灰黄褐色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	5	ナデ	ナデ	明黄褐色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	6	ナデ・貝殻条痕・研磨	貝殻条痕	にぶい黄褐色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	炭化物付着
	7	研磨	研磨	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英・雲母	
	8	ナデ	ナデ	橙色	明黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	炭化物付着
	9	ナデ・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい赤褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	炭化物付着
	10	研磨	研磨	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英・雲母	
	11	研磨	ナデ	明黄褐色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英	
	12	研磨	研磨	灰褐色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	炭化物付着
	13	貝殻条痕・ナデ	ナデ	橙色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	
17	14	貝殻条痕・ナデ	ナデ	明赤褐色・にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英	炭化物付着・赤色顔料付着
	15	貝殻条痕・研磨	ナデ	橙色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・雲母	炭化物付着
	16	研磨	研磨	明黄褐色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英	
	17	研磨	研磨	灰褐色	黒褐色	良	角閃石・長石・石英・雲母	
	18	貝殻条痕・研磨	貝殻条痕・ナデ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・小礫	
	19	研磨・ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい黄橙色・オリーブ黒色	良	角閃石・長石・石英	
	20	研磨	ナデ	明赤褐色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	炭化物付着
	21	ナデ	ナデ	明黄褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	炭化物付着
	22	研磨	研磨	にぶい黄橙色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・赤色粒子	
	23	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	黄灰色	良	角閃石・長石・石英・雲母	
	24	ナデ・擦過	ナデ	明赤褐色	浅黄色	良	角閃石・長石・石英	底面調整・ナデ
	25	研磨	研磨	にぶい黄橙色	灰黄色	良	角閃石・長石・石英・雲母	底面調整・擦過
	26	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英	底面調整・ナデ
18	27	研磨	研磨	にぶい黄橙色・暗灰黄色	褐灰色・にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	炭化物付着
	28	研磨	研磨	赤褐色	赤褐色・黒褐色	良	角閃石・長石・石英	
	29	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	橙色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石	
	30	研磨	研磨	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英	
	31	研磨	研磨	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色・黄灰色	良	角閃石・長石・石英	

第5表　土坑1出土遺物観察表（石器）

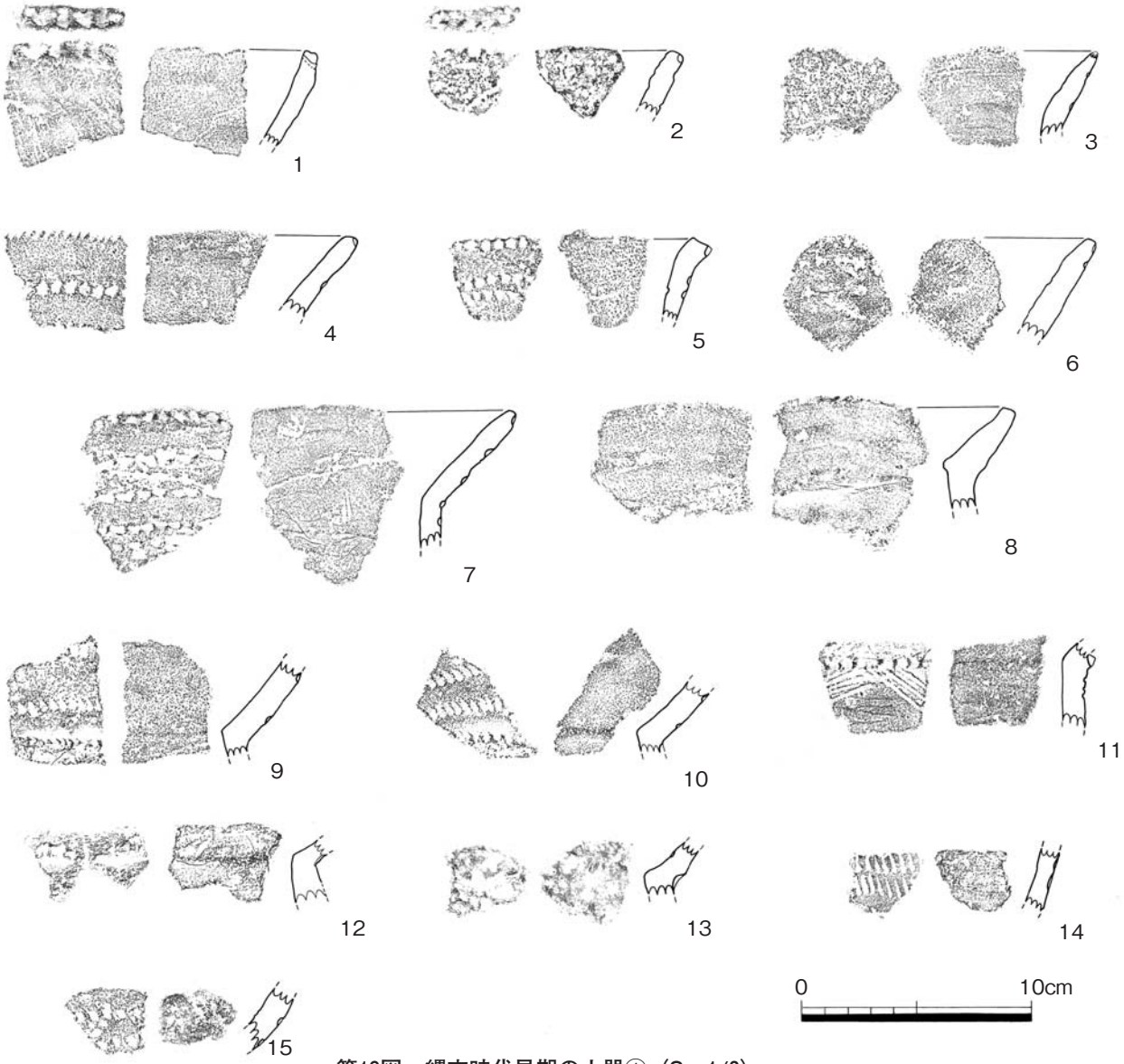
図	番号	石材	調査区	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）
18	32	安山岩	3区	9.5	8.3	2.2	211.9
	33	結晶片岩	3区	7.6	7.6	1.2	112

3. 包含層出土の土器

縄文時代早期の土器（第19図・第20図）

第19図は頸部および口縁部の資料である。

1〜**8**は口縁部資料でいずれも外反する。**1**は口唇部に垂直に刻目を施し，内面は丁寧にナデ調整を行う。**2**は口唇部外端に列点を施す。その他の部分については摩耗が激しく文様は確認できなかった。**3**は細長い楕円状の列点を2段施す。口唇部断面はすぼまる形を呈する。**4**は口唇部外端に左右の間隔の狭い細かな刻目を施し，下部にそれよりも一回り大きな列点を施す。**5**は口唇部に先の尖った鋭い工具で列点を施し，下部にも棒状の工具で上下の間隔の狭い列点を2段施文する。**6**は全体的に摩耗が激しいが，口唇部とその下部に，わずかに縦長の列点が確認できる。**7**は大きく外反し，内面に稜線をつくる。口縁部全体に横長の楕円状の列点を施す。口唇部外面にも列点を施すが，器壁に対して垂直に刺突するため，他と比べ円形に近い形を呈する。**8**は無文で，大きく外反し屈曲部内側に粘土紐による段をつくる。器壁が厚く，口唇部上端は平坦に整える。



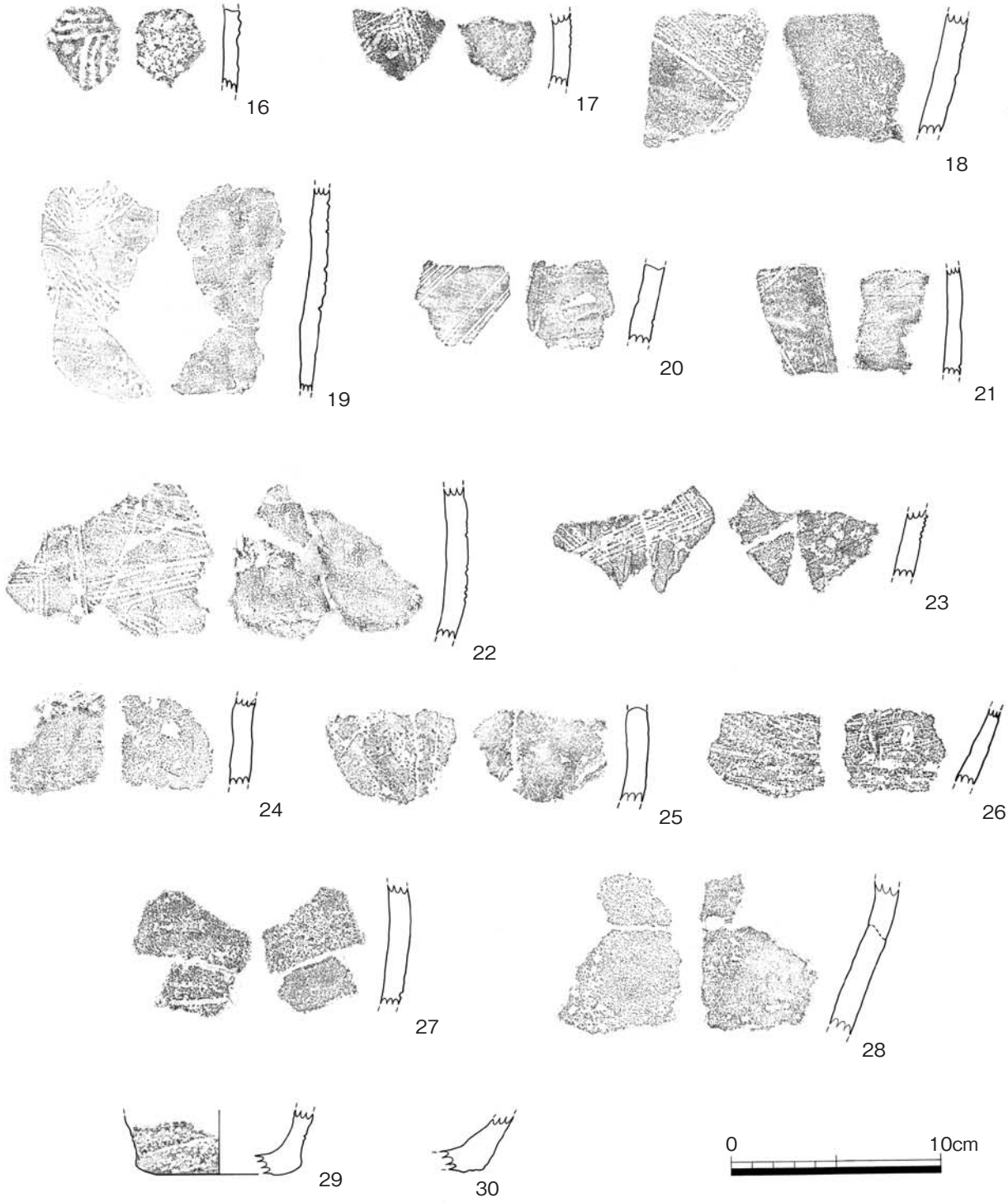
第19図　縄文時代早期の土器①（S＝1/3）

9〜15は頸部資料である。**9**と**10**は同一個体の土器である。頸部ではっきりと屈曲し，内面に稜線をなす。屈曲部と口唇部全体に列点を施す。**11**は胴部と口縁部の屈曲部直上に先端のとがった棒状の工具で列点を施し，下部には3〜5条の沈線を組み合わせた山形の文様を施す。**12**は全体的に摩耗が激しいが，屈曲部上部にヘラ状工具で施した刻目が確認できる。**13**は胎土に砂粒が多く混ざる，粗雑なつくりをしている。屈曲部に縦長の比較的大きな列点らしきものが確認できるが，摩耗が激しいため礫の混入による圧痕とも考えられる。**14**はヘラ状工具による刻目を2段施す。下部にはわずかではあるが横方向の沈線も確認できる。調整は内外面ともにナデである。**15**は棒状工具による列点を施す。器壁は厚く，胎土には小礫が目立つ。調整は内外面ともにナデである。

第20図は胴部・底部資料である。

16〜28は胴部資料である。**16**は外面に3条からなる沈線を組み合わせた文様を描く。**17〜19**は2本の沈線で区画を作り，その中に撚糸文を施す。**17**は細い2本の沈線の中を撚糸文で満たす。調整は内外面ともにナデである。**18**は沈線による区画を幅広く設け，細かい撚糸文で満たす。調整は内外面ともにナデである。**19**は先端のとがった工具で沈線を深く施文し，格子状の撚糸文で満たす。一部に撚糸文のはみ出しが見られることから，施文後の調整はそれほど丁寧には行わなかったようである。**20〜23**は数条の沈線を交差させ組み合わせた文様を施す。**20**は2〜3条の沈線が斜め方向に引かれる。外面は丁寧なナデ調整で，内面は横方向のナデ調整である。**21**は沈線が格子状に交わるように施されていると推測できるが，文様を確認できるのがごく一部のため，全体像は不明である。**22**は数段の列点と5〜6条の沈線を組み合わせた文様を施す。上部に数段の列点を施し，下部からは5〜7条の沈線をランダムな格子状に施文する。**23**は5〜6条の沈線を格子状に組み合わせて施文する。**24〜28**は無文である。**24**は胎土に小礫が目立ち，調整が粗雑である。調整は内外面ともにナデである。**25**は外面に1カ所縦位に引かれた沈線が確認できる。調整は内外面ともにナデである。**26**は下部の膨らみ方から，底部に近い部分の土器片だと思われる。内外面ともにナデ調整で，内面には貝殻条痕も認められる。**27**は外面下部に沈線が引かれ，調整はナデである。**28**は粗雑なつくりをしており，内外面ともにナデ調整である。

29・30は底部資料である。**29**は復元底径7.8cm を測る平底である。外面に調整時についたと考えられる線状の圧痕が認められる。**30**は残存部が少なく，底径を測るまでにいたらなかった。平底で，外面が粗雑なナデ調整なのに対し，内面は丁寧な横方向のナデを施す。



第20図　縄文時代早期の土器②（S＝1/3）

第6表　縄文時代早期土器観察表

図	番号	層位	調査区	文様・調整		色調		焼成	胎土	備考
				外面	内面	外面	内面			
19	1	Ⅲa	20区	擦過	ナデ	にぶい黄橙色・橙色	明褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	口唇部に刻目
	2	Ⅲa	15区	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英	口唇部に刻目
	3	Ⅲa	17区	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・砂粒	
	4	Ⅲb	16区	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英	口唇部に刻目
	5	Ⅲb	14区	ナデ	ナデ・擦過	にぶい黄橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	6	Ⅲa	12区	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	橙色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	7	Ⅲa	12区	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色・褐灰色	良	角閃石・長石・石英	赤色塗料付着
	8	Ⅲb	7区	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不良	角閃石・長石・石英	
	9	Ⅲb	16区	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	10と同一個体
	10	Ⅲb	16区	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・黒曜石	9と同一個体
	11	Ⅲb	7区	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英	
	12	Ⅱb	9区	ナデ	ナデ	褐灰色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	13	Ⅲb	13区	ナデ	欠損	にぶい黄褐色	明褐色	不良	角閃石・長石・石英・小礫	
	14	Ⅲb	11区	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	黄褐色	良	角閃石・長石	
	15	Ⅲb	16区	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	明赤褐色	不良	角閃石・長石・石英・赤色粒子・小礫	
20	16	Ⅲa	16区	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	不良	角閃石・長石・石英	
	17	Ⅱb	9区	ナデ	ナデ	褐灰色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英	
	18	Ⅲb	16区	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英	
	19	Ⅲa, Ⅲb	12区	ナデ	ナデ	橙色	にぶい褐色	良	角閃石・長石・石英	
	20	Ⅲb	12区	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	21	Ⅱb	11区	ナデ・擦過	ナデ	明赤褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・石英	炭化物付着
	22	Ⅱb	9区	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	23	Ⅲb	13区	ナデ	ナデ	橙色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英	
	24	Ⅲb	12区	ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい黄橙色	不良	角閃石・長石・石英・小礫	炭化物付着
	25	Ⅲb	13区	ナデ	ナデ	橙色	灰黄褐色	良	角閃石・長石・石英	
	26	Ⅲa	15区	ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄橙色	暗黄灰色・黒褐色	良	角閃石・長石・石英・砂粒	
	27	Ⅲb	14区	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	不良	角閃石・長石・石英・雲母	
	28	Ⅲb	7区	ナデ	ナデ	赤褐色	にぶい黄橙色	不良	角閃石・長石・石英・小礫	
	29	Ⅲb	17区	ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整・ナデ
	30	Ⅲb	19区	ナデ	ナデ	明褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整・ナデ

縄文時代後・晩期の土器（第21図～第23図）

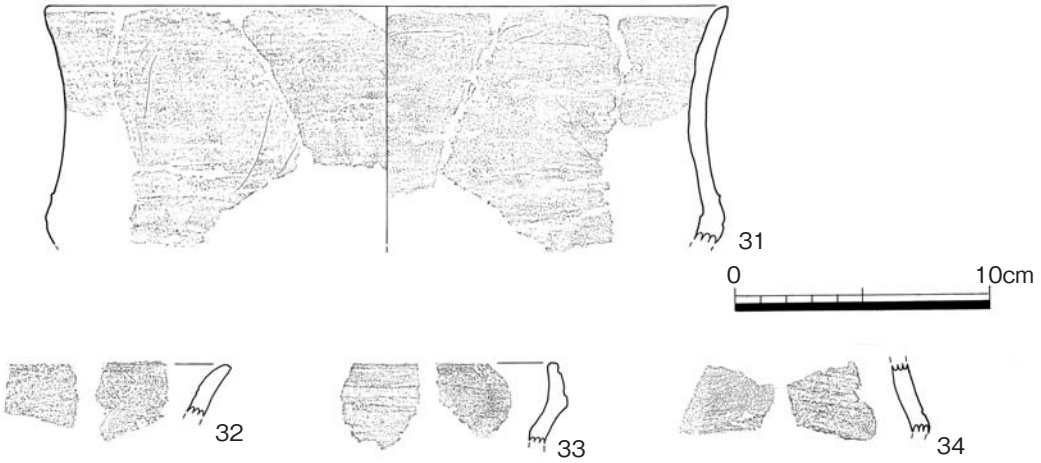
31～34は口縁部資料である。

31・32は同一個体の土器であると考えられる。復元口径26.6cm を測る。肩部がゆるやかに屈曲し，口縁部は外反する。調整は内外面ともにナデである。**33**は口縁部が立ち上がりわずかに内傾する。2本のごく浅い凹線を施し，左下端には焼成前穿孔が見られる。調整は内外面ともに研磨である。

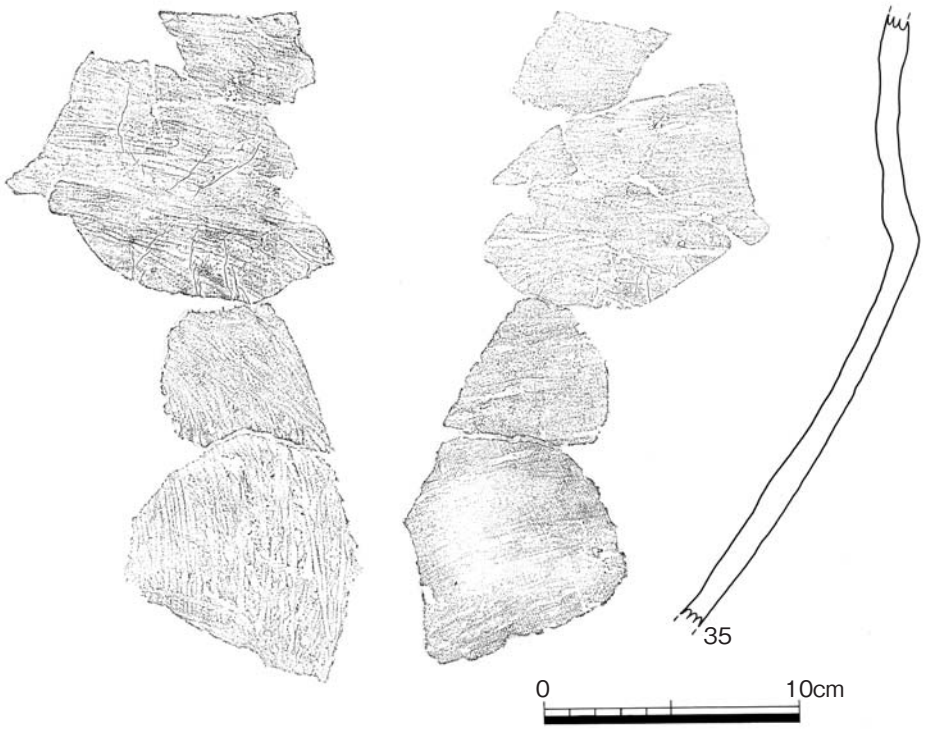
34～45は胴部資料である。**34**は胴部の張り出した部分で，研磨調整が施される。**35**は胴部で屈曲しゆるやかに張り出す。屈曲部に稜線はつくらない。上部は横方向，下部は縦方向にそれぞれ研磨する。外面に炭化物が付着していたため，放射性炭素年代測定を行った（資料 No. 3）。**36**は外面に縦方向の条痕がみられる。内面は横方向のナデ調整を施す。**37**は胎土に小礫を多く含み，調整は内外面ともにナデである。**38**は焼成が良好で，調整は内外面ともにナデである。**39**は内外面ともに研磨調整が施され，内面は黒褐色を呈する。**40**は器面全体が明赤褐色を呈する。外面が擦過調整で荒く仕上げるのに対して，内面は丁寧なナデ調整を施す。**41**は調整はナデで，外面全体が黒褐色を呈する。**42**は外面に縦方向の研磨調整を施し，内面は横方向のナデ調整を施す。**43**は胴部の張り出し部分で器壁が厚く，焼成は良好である。調整は内外面ともに研磨である。**44**は調整はナデで，内面に粘土紐をならしたような凹線がみられる。**45**は調整内外面ともに研磨で内面は煤により灰色がかる。

46～48は浅鉢形土器である。**46**は器壁が薄く，研磨調整を施す。**47**は口縁部の粘土紐部分で割れる。研磨調整が施される。

49・50は同一個体の底部資料である。焼成は良好で，摩耗のためか調整の痕は見られない。張り出しを持たない上げ底である。



第21図　縄文時代後・晩期の土器①（S＝1/3）



第22図　縄文時代後・晩期の土器②（S＝1/3）

〔参考文献〕

秋成　雅博　2011『下猪ノ原遺跡第二地区』宮崎氏埋蔵文化財調査報告書第83集　宮崎市教育委員会

秋成　雅弘・井田　篤　2012『清武上猪ノ原遺跡―4―』宮崎市埋蔵文化財調査報告書第88集　宮崎市教育委員会

寒川　朋枝　2006『堂園遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第104集　鹿児島県立埋蔵文化財センター

清田　純一　1998「縄文後・晩期土器考―中九州の縄文後・晩期土器とその並行形式について―」『肥後考古11号』肥後考古研究会

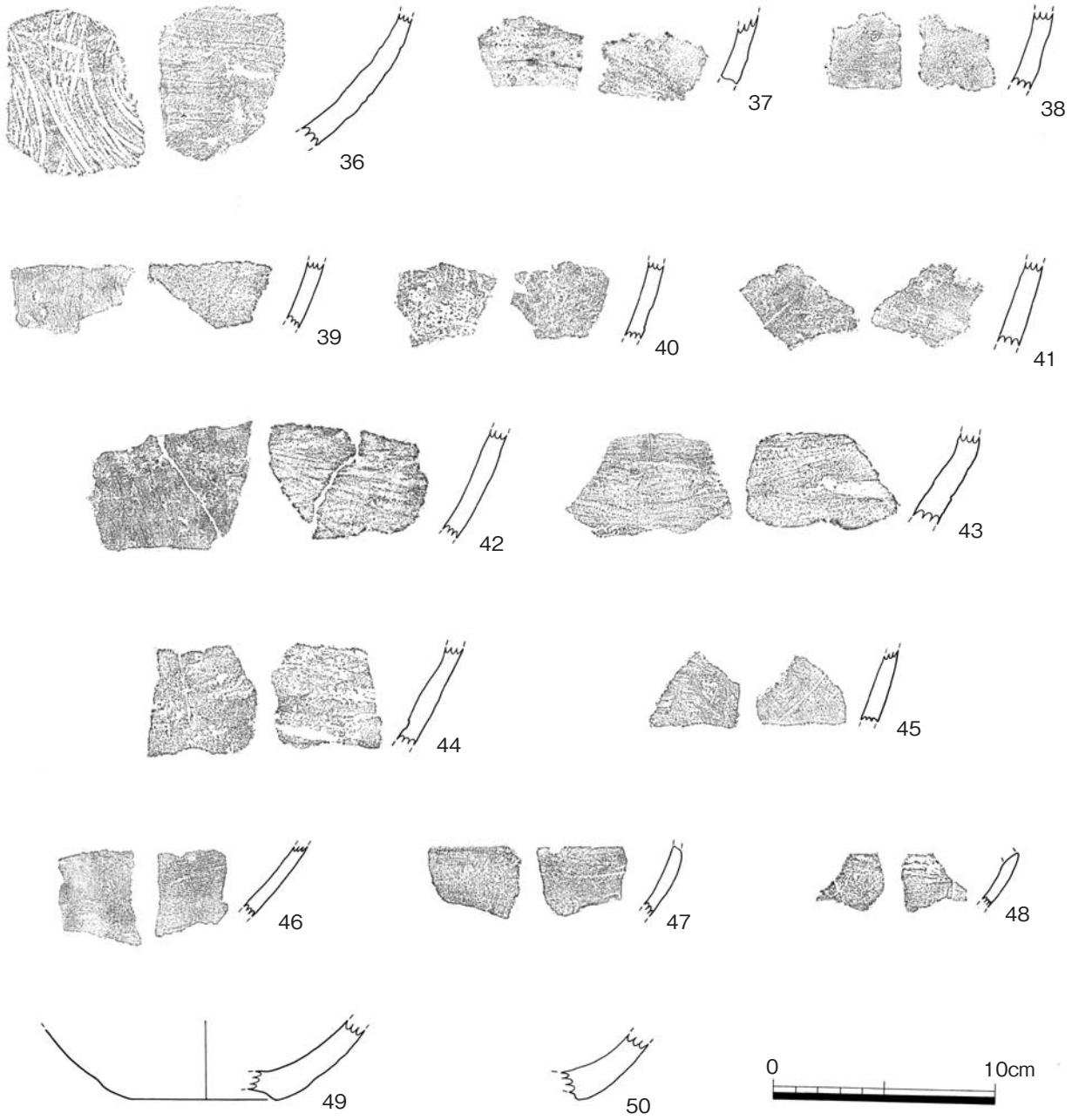
桒畑　光博　1995「南九州早期土器様式の変化について」南九州縄文通信 No. 9　南九州縄文研究会

新東　晃一　1998「塞ノ神式土器再考」『九州縄文土器研究の諸問題』九州縄文土器研究会

中田　充　2009『東名遺跡群Ⅱ』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第40集　佐賀市教育委員会

西田　巌　2009『東名遺跡群Ⅰ』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第150集　佐賀市教育委員会

2016『東名遺跡群Ⅳ―東名遺跡郡総括報告書―』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第100集　佐賀市教育委員会



第23図　縄文時代後・晩期の土器③

第7表　縄文時代後・晩期土器観察表

図	番号	層位	調査区	文様・調整		色調		焼成	胎土	備考
				外面	内面	外面	内面			
21	31	Ⅱb	3区	ナデ	ナデ	灰黄褐色	橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	炭化物付着
	32	Ⅱb	3区	ナデ	ナデ	明褐色	褐灰色・橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	33	Ⅱa	3区	研磨	研磨	にぶい黄橙色・黒褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・赤色粒子	穿孔
	34	Ⅱb	3区	研磨	研磨	橙色	橙色	良	角閃石・長石・石英	
22	35	Ⅱb	3区	研磨	研磨	明黄褐色	橙色	良	角閃石・長石・赤色粒子・雲母	炭化物付着
23	36	Ⅱb	12区	条痕	板ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	角閃石・長石・石英	赤色顔料付着
	37	Ⅱa	3区	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	良	角閃石・長石	
	38	Ⅲb	5区	ナデ	ナデ	浅黄色	浅黄色	良	角閃石・長石	
	39	Ⅱb	3区	研磨	研磨	暗灰黄色	黄灰色	良	角閃石・長石・雲母	
	40	Ⅱb	2区	擦過	ナデ	明褐色	明赤褐色	良	角閃石・長石・石英	
	41	Ⅲa	11区	ナデ・擦過	ナデ	暗灰黄色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・石英	
	42	Ⅱb	3区	研磨・ナデ	ナデ	明褐色	にぶい黄褐色	良	角閃石・長石・赤色粒子	
	43	Ⅱb	3区	研磨	研磨	にぶい黄橙色・黒褐色	にぶい橙色	良	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	44	Ⅲa	14区	ナデ	ナデ	橙色	明黄褐色・橙色	良	角閃石・長石・石英・雲母	炭化物付着
	45	Ⅱb	4区	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄色	良	角閃石・長石	
	46	Ⅲa	15区	研磨	研磨	浅黄色	浅黄色	良	角閃石・長石・赤色粒子	赤色塗料付着
	47	Ⅱa	15区	研磨	研磨	にぶい黄褐色・橙色	暗灰黄色	良	角閃石・長石・赤色粒子	
	48	Ⅱa	3区	ナデ	研磨	にぶい黄橙色	にぶい黄色	良	角閃石・長石・石英	
	49	Ⅱb	3区	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	浅黄橙色・灰黄色	良	角閃石・長石・赤色粒子	
	50	Ⅱb	3区	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	褐灰色・浅黄橙色	良	角閃石・長石・赤色粒子	

4. 石器

Ⅲ層出土の石器

1は砂岩製の台石である。節理により裏面は剥落する。2は棒状の形状の頁岩を素材としている。打撃による破損が上下に見られ，叩石として使用されたものと考えられる。3は砂岩製の砥石で，滑面を残す。4は安山岩の磨石，叩石の併用品で，中央付近に打痕と見られる窪みがある。5は砂岩製の磨石である。

6は暗灰色黒曜石を用いた石匙である。縦長の剥片を横に配してつまみ部とやや弧状となる刃部を作り出す。7は蛇紋岩製磨製石斧の破片で，破損後再加工を試みている。8はサヌカイト製のスクレイパーである。平坦な自然面を打面として三角形の大型の剥片を剥ぎ，その片方の側縁に主要剥離面側から連続的な調整を行う。9は玄武岩製の二次加工のある剥片である。切断して長方形に整えた素材の一側辺に表裏から加工を施す。10は頁岩製の剥片で，やや弧状をなす側辺に連続的な微細剥離が認められる。打点付近は切断している。11は漆黒色黒曜石の剥片である。丸い自然面を残し，円礫の母岩であったと考えられる。

12は直径0.8cm，厚さ2.5～3.5mmの玉である。結晶片岩を素材としている。

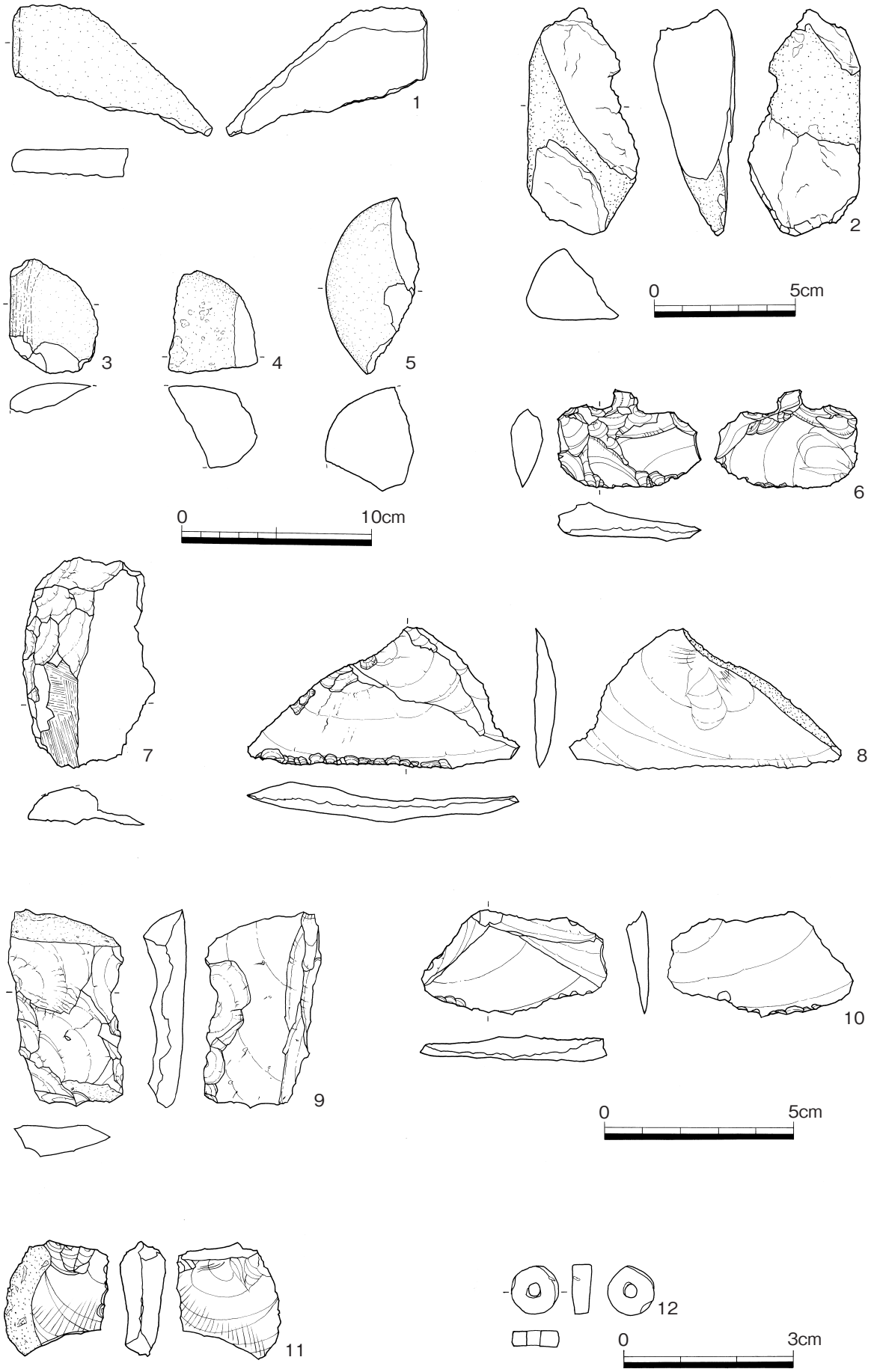
Ⅱ層出土の石器

13は頁岩製の叩石である。円礫素材であるが，わずかに残る緩い稜線部を主体に打痕が認められる。また，平坦な下面部には剥離面が幾重にも重なる。14は水磨のチャート自然礫である。在地では産出しないため，搬入品と見られる。15は頁岩製の磨製石斧である。扁平な作りで，両側縁には整形の剥離をとどめる。16は頁岩製の小型の磨製石斧である。17は安山岩の板状の素材を用いた打製石斧である。刃部付近に使用による摩滅が認められる。18は結晶片岩の破片である。器種までうかがうことはできないが，打製石斧の可能性もある。

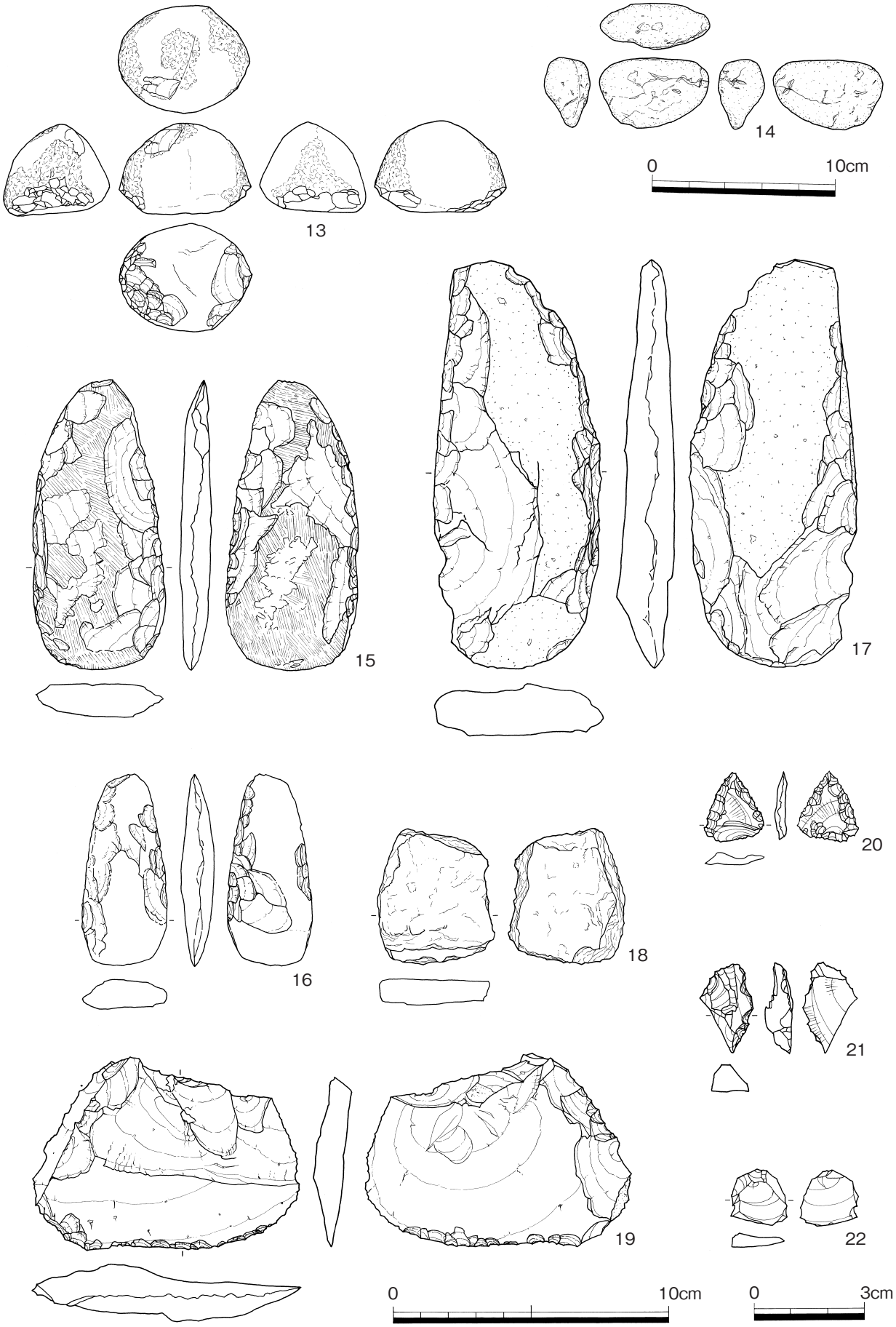
19はサヌカイトの大型で横長の剥片を素材とするスクレイパーである。末端部に両面から丁寧で連続的な剥離を施す。20は漆黒色黒曜石を用いた石鏃である。両面ともに素材面を大きく残し，両側縁に連続的な調整剥離を行う。21は漆黒色黒曜石製の二次加工のある剥片で，断面三角形の厚い素材の一辺に連続的な細かい剥離が認められる。22は暗灰色黒曜石の小型の剥片である。

その他の石器

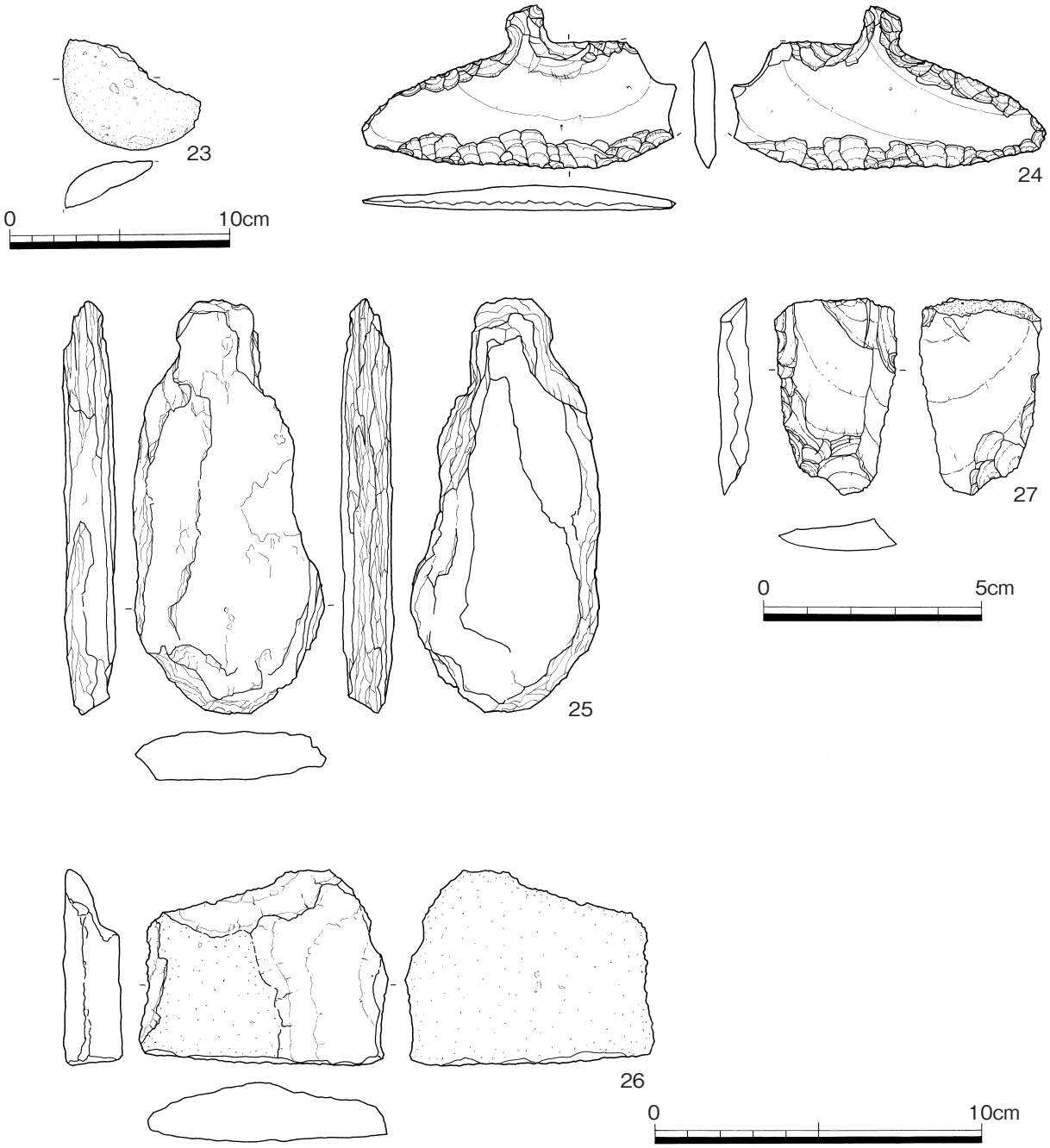
23は安山岩製の磨石である。24はサヌカイト製の石匙である。扁平で横長の剥片を素材とし，打点付近につまみ部を，末端部に刃部を両面からの加工によって作り出す。25は結晶片岩製の打製石斧である。短冊形を呈していたものと考えられ，刃部から片方の側辺にかけて使用による摩滅が見られるが，もう片方の側辺は欠損している。26は安山岩製の打製石斧である。片面には板状素材の節理面をそのまま残している。27は玄武岩の縦長剥片で，片方の側辺に二次加工を施す。



第24図　Ⅲ層出土の石器（1・3～5：S＝1/3，2・6～9：S＝1/2，10・11：S＝2/3，12：S＝1/1）



第25図　Ⅱ層出土の石器（13・14：S＝1/3，15～19：S＝1/2，20～22：S＝2/3）



第26図　その他の石器（23：Ｓ＝1/3，24～26：Ｓ＝1/2，27：Ｓ＝2/3）

第8表　石器観察表

図	番号	取上番号	器種	石材	層位	グリット	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
24	1	HOK 0132	台石	砂岩	Ⅲb	12区	6.9	10.6	1.6	91.6
	2	HOK 0179	叩石	頁岩	Ⅲb	12区	8.0	4.0	2.9	72.1
	3	HOK 0134	砥石	砂岩	Ⅲb	13区	6.0	4.7	1.6	43.9
	4	HOK 0172	磨石・叩石	安山岩	Ⅲb	17区	5.4	4.7	4.7	97.6
	5	HOK 0072	磨石	砂岩	Ⅲa	12区	9.3	5.0	5.1	219.1
	6	HOK 0073	石匙	黒曜石	Ⅲa	11区	5.1	3.5	0.8	13.8
	7	HOK 0176	磨製石斧	蛇紋岩	Ⅲb	9区	7.4	4.1	1.5	46.1
	8	HOK 0123	スクレイパー	サヌカイト	Ⅲb	8区	9.6	5.0	1.4	35.6
	9	HOK 0117	二次加工剥片	玄武岩	Ⅲa	17区	5.2	3.1	1.1	16.7
	10	－	微細剥離剥片	頁岩	Ⅲa	14区	5.0	2.8	0.7	8.9
	11	HOK 0194	剥片	黒曜石	Ⅲb	16区	3.0	2.8	1.2	7.1
	12	HOK 0105	玉	結晶片岩	Ⅲa	16区	0.9	0.8	0.3	0.4
25	13	HOK 0013	叩石	頁岩	Ⅱb	2区	4.9	7.2	5.7	260.1
	14	HOK 0038	原石	チャート	Ⅱb	5区	3.8	6.0	2.5	66.7
	15	HOK 0067	磨製石斧	頁岩	Ⅱb	13区	10.5	4.8	1.2	77.8
	16	HOK 0053	磨製石斧	頁岩	Ⅱb	9区	7.0	3.1	1.2	31.7
	17	HOK 0048	打製石斧	安山岩	Ⅱb	9区	14.8	6.1	2.1	200.1
	18	HOK 0039	不明	結晶片岩	Ⅱb	6区	5.0	4.3	1.0	29.2
	19	HOK 0040	スクレイパー	サヌカイト	Ⅱb	7区	9.7	7.0	2.1	95.3
	20	HOK 0076	石鏃	黒曜石	Ⅱb	13区	1.9	1.6	0.3	0.8
	21	HOK 0021	二次加工剥片	黒曜石	Ⅱb	3区	2.4	1.5	0.8	1.7
	22	HOK 0028	剥片	黒曜石	Ⅱb	3区	1.5	1.6	0.4	0.9
26	23	－	磨石	安山岩	表土	9区	5.1	6.3	3.0	77.2
	24	－	石匙	玄武岩	石垣裏込	14区	9.6	5.0	0.8	31.8
	25	－	打製石斧	結晶片岩	石垣裏込	10区	12.7	5.8	1.6	144.9
	26	－	打製石斧	安山岩	表土	9区	6.0	7.7	1.8	97.6
	27	－	二次加工剥片	玄武岩	表土	13区	4.5	2.8	0.8	10.2

第Ⅳ章　まとめ

第1節　調査成果の分析

1. 遺物の分布

全体の分布の特徴として，3区の土坑1周辺と9区に集中して出土している。また，植物根が減り，層位が安定してくる11区より南側からの出土が主となっている。ここでは遺物全体，土器全体（時期別），石器（層位別）の分布の特徴について述べていく。

遺物全体の分布

土器と石器に出土域の大きな差異は認められず，ともに3区の土坑1付近，11～18区の調査区南部に出土が集中する。北側での出土数が乏しいのは竹をはじめとした植物根による撹乱が激しく，また後世の削平により包含層本来の堆積が消失していたためと考えられる。対して調査区南側では比較的層位が安定するため，まとまった出土が見られたと考えられる。

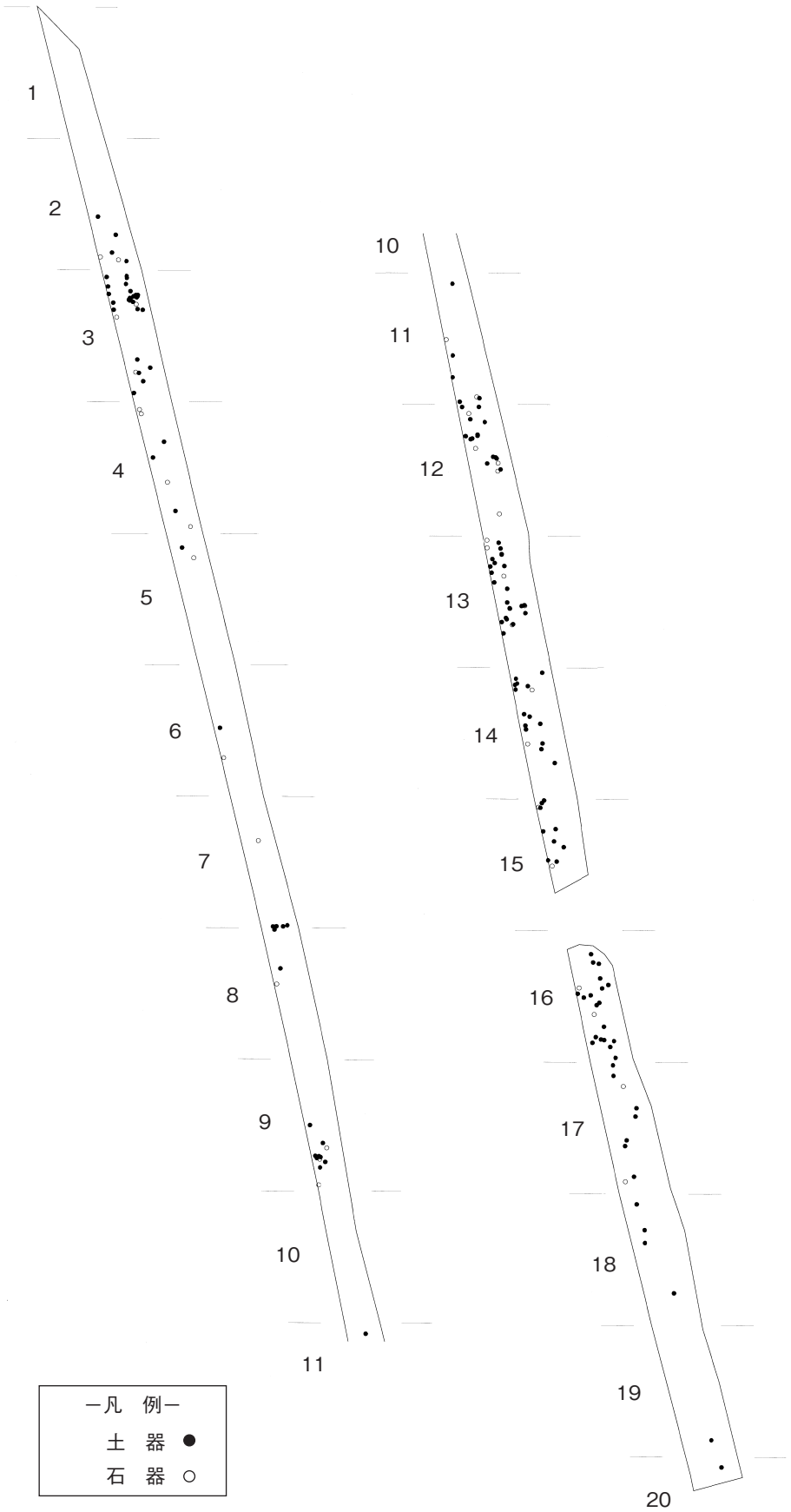
土器の分布（時期別）

縄文時代早期土器は11～18区においてまとまった出土が認められる。また，7・8区と9区においても若干の出土が見られる。縄文時代後・晩期土器は，11～18区で少数認められるが，5区以北からの出土が主である。これは後・晩期土器の主要な包含層であるⅡ層が2～5区にのみ残存し，その他の区においては削平によりほぼ消失しているという堆積状況を反映しているといえる。

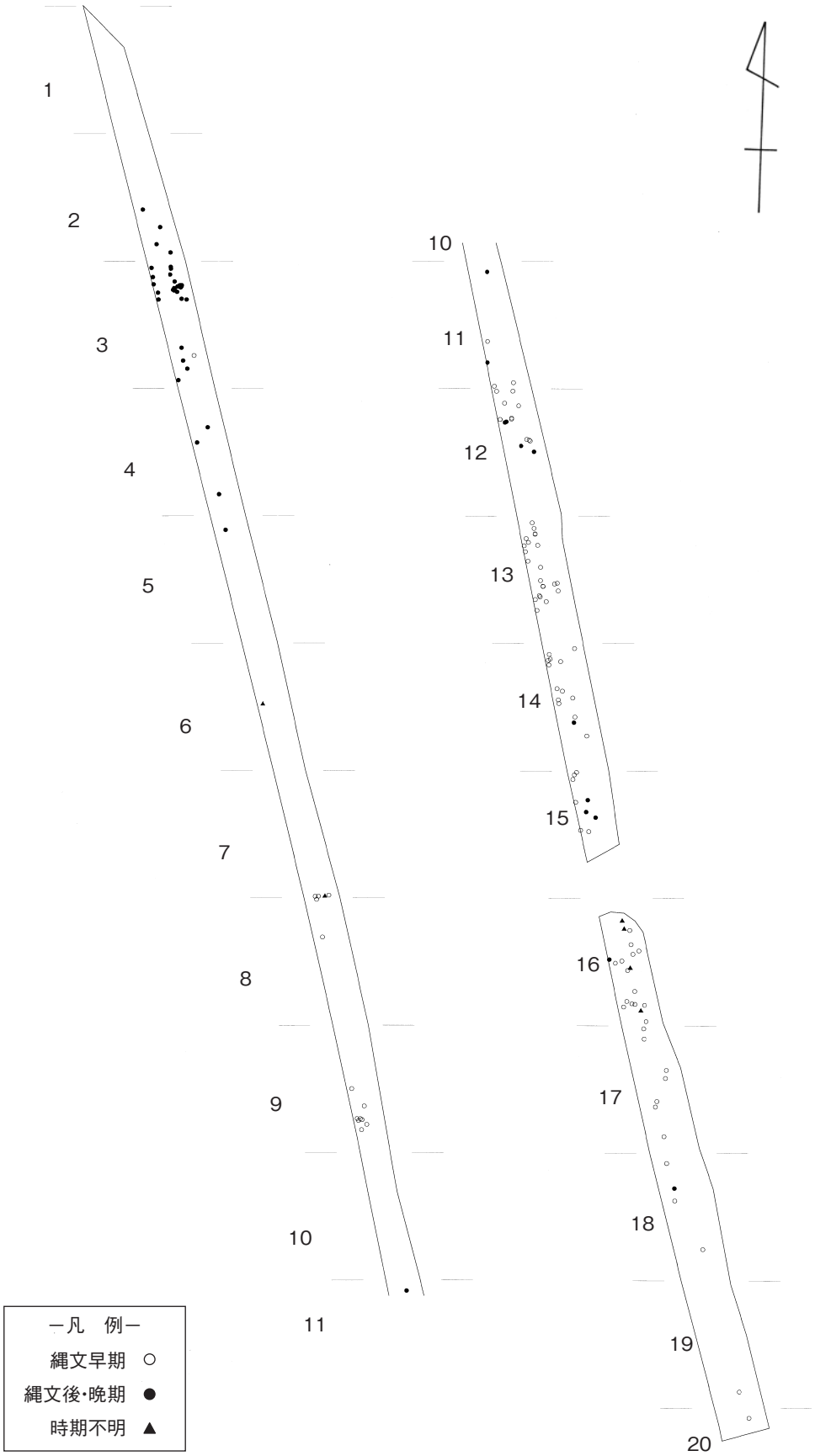
石器の分布（層位別）

Ⅱａ層からの出土は調査区南端部に1点のみの出土にとどまる。Ⅱｂ層からの出土は2～14区の間に点在し，全体の出土数から見ても比較的割合が大きい。Ⅲａ層からの出土は11～17区にごく少数出土するにとどまった。Ⅲｂ層からの出土は11～17区の広範囲で見られる。点数は少ないが全体の出土数の割合としてはⅡｂ層に次ぐ出土である。

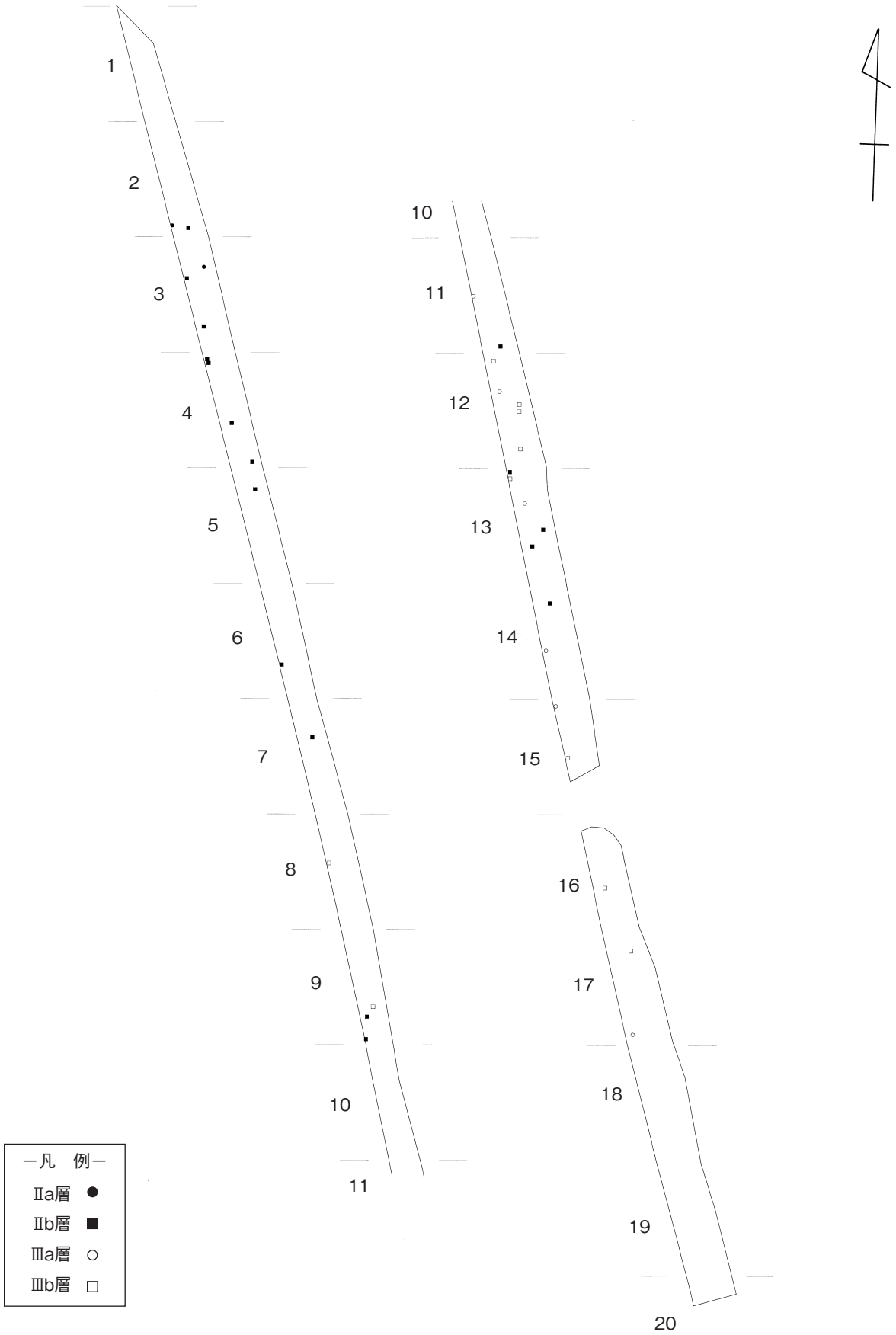
土器と比べて後・晩期の包含層であるⅡ層からの出土数と早期の包含層であるⅢ層からの出土数に差は見られなかった。



第27図　遺物全体分布図（S＝1/400）



第28図　土器（時期別）分布図（S＝1/400）



第29図　石器（層位別）分布図（S＝1/400）

2. 遺物の内容

土器

出土位置を座標観測した土器は152点である。その内訳は縄文時代早期土器と縄文時代後・晩期土器の2つに大別される。それぞれの出土点数は早期土器が97点，晩期土器が49点である。

縄文時代早期土器はⅢ層からの出土が全体の86.5％を占める。列点を施文した外傾する口縁部や，撚糸文と沈線を組み合わせた文様をもつ胴部といった塞ノ神式土器の特徴をもつ資料が多く認められた。

縄文時代後・晩期土器はⅡ層からの出土が全体の81.6％を占め，特にⅡｂ層からの出土が多い。調査区北側からの出土がほとんどで,5区以南では極端に少ない。5区以南で出土がほとんど見られなかった理由としては，縄文時代後・晩期土器の包含層が削平によりほぼ消失していたこと，堆積部分への竹根をはじめとした植物根の影響があったことが一因としてあげられよう。また，縄文時代後・晩期土器の集中的な分布域と，同様に縄文時代後・晩期土器が大量に出土した土坑1の検出位置が重なることは，土坑1の上位部分が造営後ほどなく撹乱を受けたことも可能性として考慮しておく必要があろう。

石器

土器の出土状況を見ると，Ⅱ層から縄文時代後晩期のものが，Ⅲ層から縄文時代早期のものが多く出土する傾向にある。石器についても，同様の傾向があるものと考えられる。

島原半島東部においては，剥片鏃や打製石斧の利用，結晶片岩の石材利用は縄文時代後期以降に見られる。暗灰色黒曜石の利用は，縄文時代早期によく見られる。そうした島原半島東部の傾向を，東大窪遺跡の石器群も反映している可能性がある。

3. まとめ

東大窪遺跡は雲仙火山群から広がる丘陵上に所在する。今回発掘を行った調査区は，海岸に向かって緩やかに広がる丘陵上の尾根に位置する。

今回は調査区幅が限定されていたため，遺跡全体としての様相は図りかねるが，縄文時代早期土器の出土状況から調査区周辺の尾根部分を生活域にしていたと推測できる。また，3区で検出した多量の縄文時代後・晩期土器の遺物を含む土坑1のような遺構が，5区以南で皆無であることを考えれば，縄文時代後・晩期の生活域が1～4区を含んで，調査区よりさらに北側へ広がる可能性も考えられよう。

第9表　出土遺物内訳

	Ⅱａ層	Ⅱｂ層	Ⅲａ層	Ⅲｂ層	Ⅳａ層	計
土器	8	45	39	59	1	152
石器	2	17	7	10		36
計	10	62	46	69	1	188

第10表　出土土器内訳

	Ⅱａ層	Ⅱｂ層	Ⅲａ層	Ⅲｂ層	Ⅳａ層	計
縄文時代後・晩期	8	32	8	1		49
縄文時代早期		12	30	54	1	97
不明		1	1	4		6
計	8	45	39	59	1	152

第2節　自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．自然科学分析の概要

東大窪遺跡から採取された試料について自然科学分析を行った。分析内容は，放射性炭素年代測定5点，蛍光X線分析（玉類の材質分析）1点である。以下に，各分析項目ごとに試料の詳細，分析方法，分析結果および考察・所見を記載する。

Ⅱ．放射性炭素年代測定

1．はじめに

放射性炭素年代測定は，光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が，放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体，骨，貝殻，土壌，土器付着炭化物などが測定対象となり，約5万年前までの年代測定が可能である（中村，2003）。

2．試料と方法

次表に，測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

試料名	試料の詳細	種類	前処理･調整	測定法
№1	土坑1，土器（外面）	土器付着炭化物	酸洗浄	AMS
№2	土坑1，土器（内面）	土器付着炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄	AMS
№3	後・晩期精製0008，土器（外面）	土器付着炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄	AMS
№4	サンプル2	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄	AMS
№5	サンプル3	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄	AMS

3．測定結果

加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）によって得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行い，放射性炭素（^{14}C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。次表にこれらの結果を示す。

試料名	測定№（Beta-）	未補正^{14}C 年代（年 BP）	δ^{13}C（‰）	^{14}C 年代（年 BP）	暦年代（較正年代）2σ：95％確率
№1	428784	3080±40	－25.9	3070±40	Cal　BC　1425－1220
№2	428785	3110±30	－26.0	3090±30	Cal　BC　1425－1265
№3	428786	3090±30	－26.2	3070±30	Cal　BC　1415－1260，1240－1235
№4	428787	3080±30	－26.3	3060±30	Cal　BC　1410－1225
№5	428992	3180±30	－25.9	3170±30	Cal　BC　1500－1405

Beta：米国 Beta Analytic Inc の測定番号，BP：Before Physics，Cal：Calibrated，BC：紀元前

（1）未補正^{14}C 年代

試料の^{14}C/^{12}C 比から，単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}C の半減期は5,730年であるが，国際的慣例により Libby の5,568年を用いている。

（2）δ（デルタ）^{13}C 測定値

試料の測定^{14}C／^{12}C 比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ^{13}C 値を−25（‰）に標準化することで同位体分別効果を補正している。

（3）^{14}C 年代

δ^{13}C 測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代較正にはこの年代値を使用する。

（4）暦年代（Calendar Years）

^{14}C 年代値を実際の年代値（暦年代）に近づけるには，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中^{14}C 濃度の変動，および^{14}C の半減期の違いを較正する必要がある。暦年代較正には，年代既知の樹木年輪の詳細な^{14}C 測定値，サンゴの U/Th 年代と^{14}C 年代の比較，および湖の縞状堆積物などの検討により作成された較正曲線（IntCal 13）を使用した。暦年代は，^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した年代の幅を表し，ここでは信頼限界2σ（シグマ）（95％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では，複数の値が表記される場合もある。

4. 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果，№1の土器付着炭化物では3070±40年 BP（2σ の暦年代で BC 1425～1220年），№2の土器付着炭化物では3090±30年 BP（BC 1425～1265年），№3の土器付着炭化物では3070±30年 BP（BC 1415～1260，1240～1235年），№4の炭化物では3060±30年 BP（BC 1410～1225年），№5の炭化物では3170±30年 BP（BC 1500～1405年）の年代値が得られた。

文献

Paula J Reimer et al., (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, p.1869-1887.

中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正．環境考古学マニュアル．同成社，p. 301-322.

Ⅲ．蛍光Ｘ線分析（材質分析）

1. はじめに

物質にＸ線を照射すると，その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光Ｘ線）が放出され，この蛍光Ｘ線を分光して波長と強度を測定することで，物質に含まれる元素の種類や量を調べる

ことができる。

この方法を用いて，考古学分野では朱やベンガラなどの顔料分析，金属製品の材質分析，リン−カルシウム分析などが行われている。また，指標となる特定の元素の検出パターンの比較から，須恵器の生産地推定や黒曜石の産地推定なども行われている。

2. 試料

分析試料は，東大窪遺跡から出土した玉類1点である（写真参照）。

3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子㈱製，JSX3100R Ⅱ）を用いて，元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。測定の条件は，測定時間240秒，照射径3.0mm，電圧30kV，試料室内真空である。なお，定期的に地質標準試料（JG1）を測定して精度の検証を行った。

4. 分析結果

蛍光X線分析の結果，Mg，Al，Si，P，S，K，Ca，Ti，V，Cr，Mn，Fe，Ni，Rb，Y，Zrの16元素が検出された（自動定性分析）。表1に各元素の定量分析結果（wt%）を示す。定量分析結果は，慣例により代表的な酸化物名で表記した。なお，今回は非破壊分析のため試料表面の研磨を行っていないことから，定量分析結果の数値は必ずしも正確なものとはいえない。

分析の結果，ケイ素（SiO_2）の含量が50.3%，アルミニウム（Al_2O_3）が27.1%，カリウム（K_2O）が9.5%，マグネシウム（MgO）が4.0%，鉄（Fe_2O_3）が3.7%，チタン（TiO_2）が3.3%，クロム（Cr_2O_3）が1.5%などとなっている。

5. 所見（材質同定）

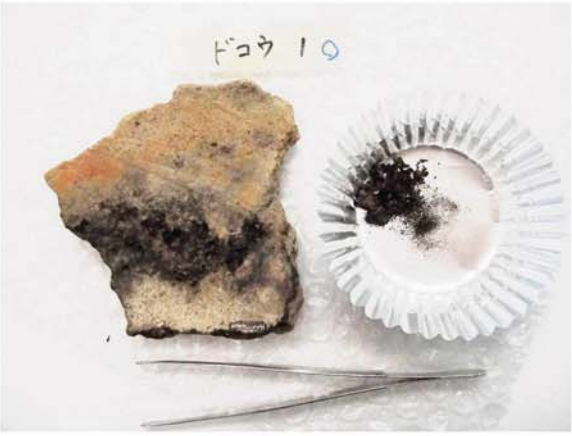
実体顕微鏡観察では，玉は緑色を呈しており，剥がれる性質が顕著で，反射が明瞭な粒子が多く認められることから，緑色の結晶片岩であるという所見が得られた。蛍光X線分析結果では，ケイ素，アルミニウム，カリウムが主要元素であることから，玉の材質は白雲母と考えられる。また，マグネシウムや鉄が含まれることから，低温高圧型の変成岩に多産する白雲母であるフェンジャイト（phengite）と考えられる。さらに，付随する元素としてクロムが認められることから，緑色の白雲母であるクロム白雲母（Fuchsite）を主要構成鉱物とする結晶片岩である「クロム白雲母片岩」と同定される。

クロム白雲母片岩の原産地は，熊本県南部の肥後変成岩帯と推定されており，この石材を利用した玉製品は熊本平野北部をはじめ九州各地で出土している（大坪，2007）。

文献

大坪志子（2007）九州地方の石製装身具―後晩期の玉類を中心とした石材同定―．石川県埋蔵文化財情報第17号．財団法人石川県埋蔵文化財センター，p.18-20.

年代測定　No.1



年代測定　No.2

年代測定　No.3

年代測定　No.4（左）, No.5（右）

蛍光X線分析　玉

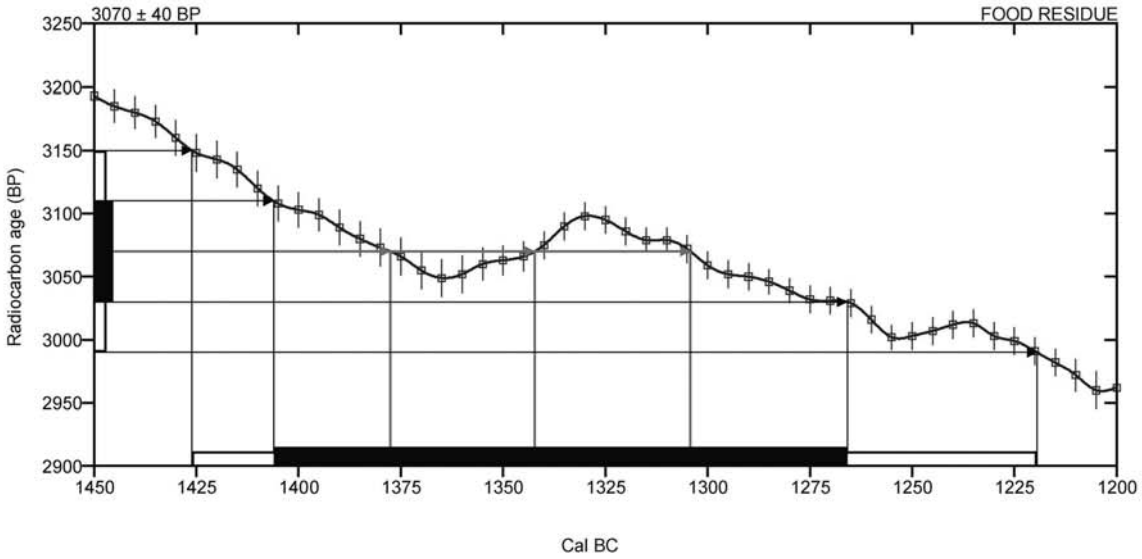
蛍光X線分析　玉（同一物の裏側）

東大窪遺跡の分析試料写真

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12 = -25.9 o/oo : lab. mult = 1)

Laboratory number	**Beta-428784 : 11662-1/50266**
Conventional radiocarbon age	**3070 ± 40 BP**
Calibrated Result (95% Probability)	**Cal BC 1425 to 1220 (Cal BP 3375 to 3170)**
Intercept of radiocarbon age with calibration curve	Cal BC 1380 (Cal BP 3330) Cal BC 1340 (Cal BP 3290) Cal BC 1305 (Cal BP 3255)
Calibrated Result (68% Probability)	Cal BC 1405 to 1265 (Cal BP 3355 to 3215)



Database used

INTCAL13

References

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates, Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

References to INTCAL13 database

Reimer PJ et al. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0– 50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4):1869– 1887., 2013.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

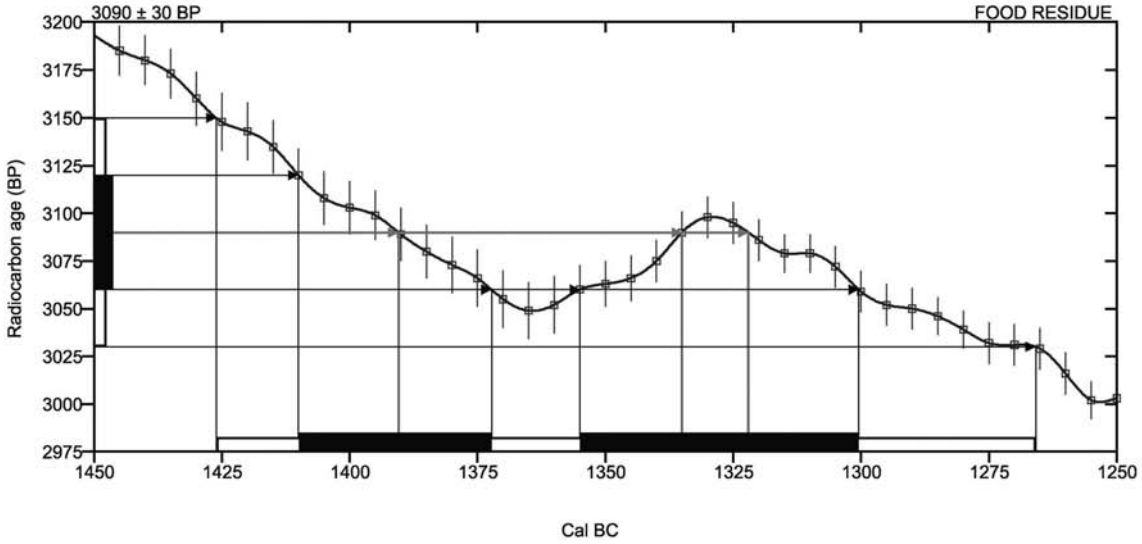
4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • Email: beta@radiocarbon.com

暦年較正結果（No. 1）

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12 = -26 o/oo : lab. mult = 1)

Laboratory number	**Beta-428785 : 11662-2/50267**
Conventional radiocarbon age	**3090 ± 30 BP**
Calibrated Result (95% Probability)	**Cal BC 1425 to 1265 (Cal BP 3375 to 3215)**
Intercept of radiocarbon age with calibration curve	Cal BC 1390 (Cal BP 3340) Cal BC 1335 (Cal BP 3285) Cal BC 1320 (Cal BP 3270)
Calibrated Result (68% Probability)	Cal BC 1410 to 1370 (Cal BP 3360 to 3320) Cal BC 1355 to 1300 (Cal BP 3305 to 3250)



Database used

INTCAL13

References

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates, Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

References to INTCAL13 database

Reimer PJ et al. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4):1869–1887., 2013.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

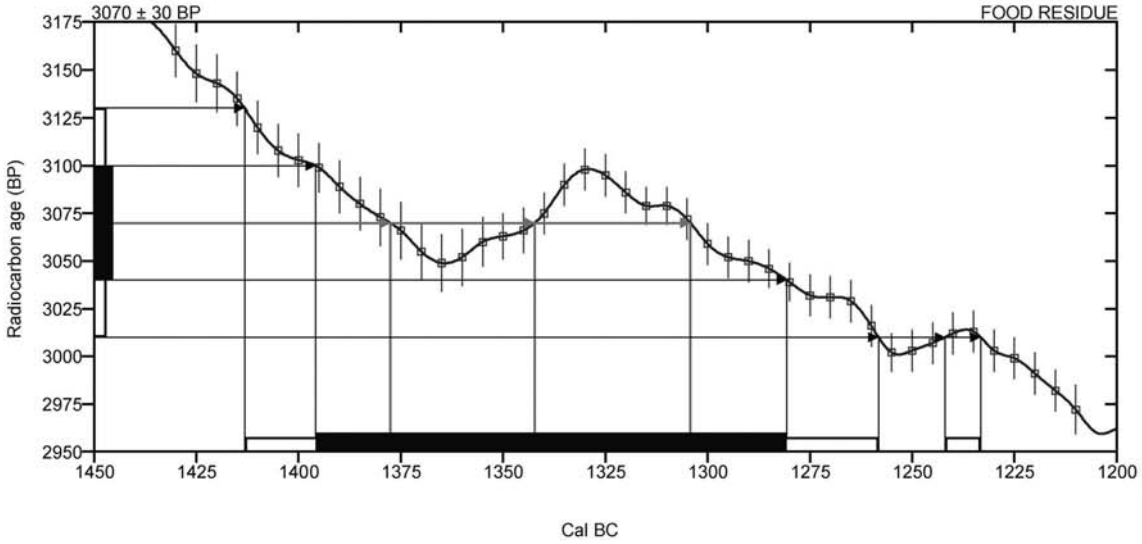
4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • Email: beta@radiocarbon.com

暦年較正結果（No. 2）

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12 = -26.2 o/oo : lab. mult = 1)

Laboratory number	**Beta-428786 : 11662-3/50268**
Conventional radiocarbon age	**3070 ± 30 BP**
Calibrated Result (95% Probability)	**Cal BC 1415 to 1260 (Cal BP 3365 to 3210)** **Cal BC 1240 to 1235 (Cal BP 3190 to 3185)**
Intercept of radiocarbon age with calibration curve	Cal BC 1380 (Cal BP 3330) Cal BC 1340 (Cal BP 3290) Cal BC 1305 (Cal BP 3255)
Calibrated Result (68% Probability)	Cal BC 1395 to 1280 (Cal BP 3345 to 3230)



Database used

INTCAL13

References

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates, Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

References to INTCAL13 database

Reimer PJ et al. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0– 50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4):1869– 1887., 2013.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

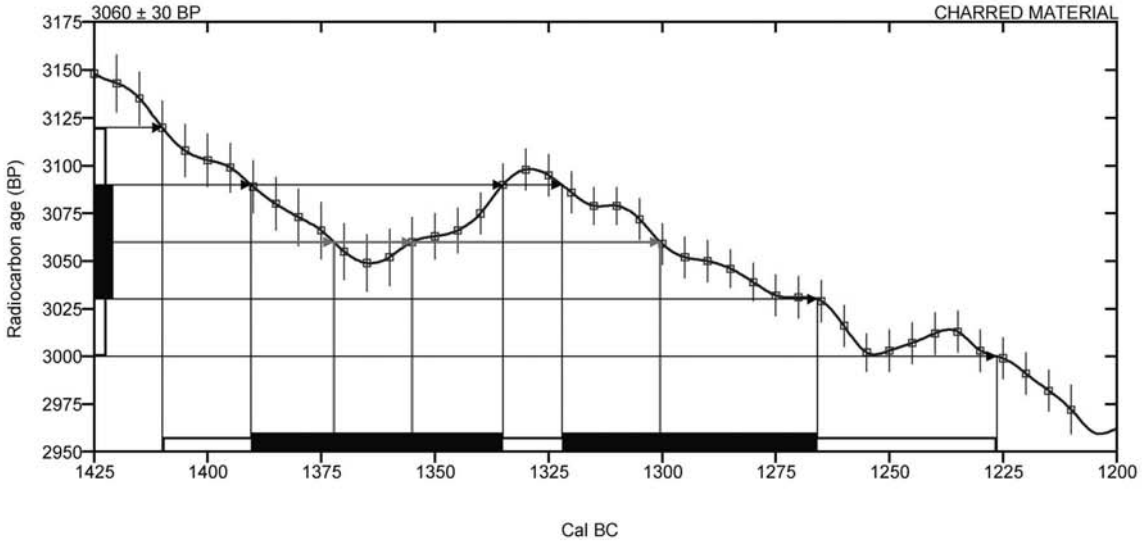
4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • Email: beta@radiocarbon.com

暦年較正結果（No. 3）

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12 = -26.3 o/oo : lab. mult = 1)

Laboratory number	**Beta-428787 : 11662-4/50269**
Conventional radiocarbon age	**3060 ± 30 BP**
Calibrated Result (95% Probability)	**Cal BC 1410 to 1225 (Cal BP 3360 to 3175)**
Intercept of radiocarbon age with calibration curve	Cal BC 1370 (Cal BP 3320) Cal BC 1355 (Cal BP 3305) Cal BC 1300 (Cal BP 3250)
Calibrated Result (68% Probability)	Cal BC 1390 to 1335 (Cal BP 3340 to 3285) Cal BC 1320 to 1265 (Cal BP 3270 to 3215)



Database used

INTCAL13

References

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates, Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

References to INTCAL13 database

Reimer PJ et al. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0– 50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4):1869– 1887., 2013.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

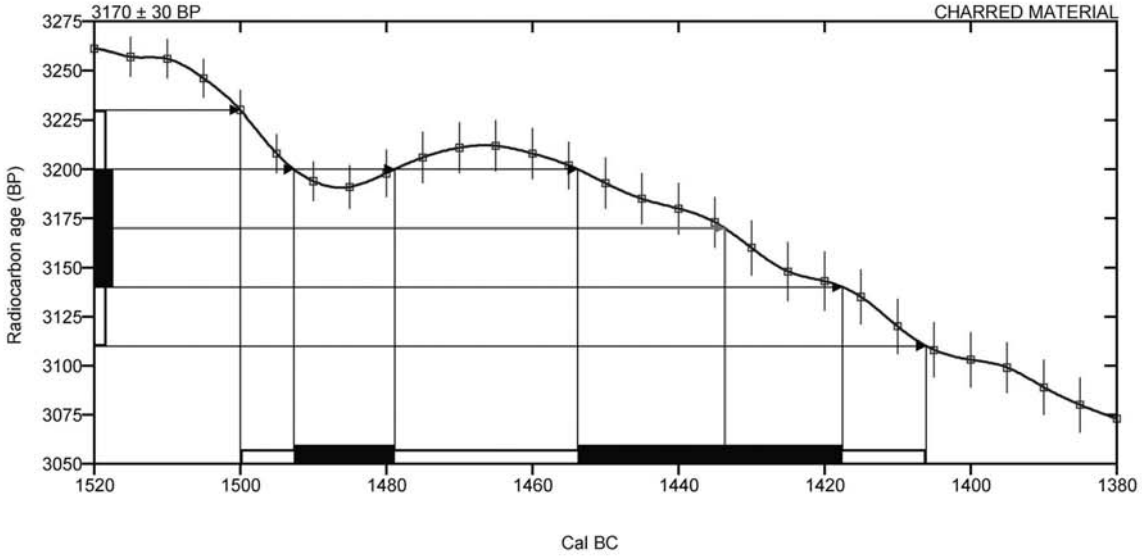
4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • Email: beta@radiocarbon.com

暦年較正結果（No. 4）

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12 = -25.9 o/oo : lab. mult = 1)

Laboratory number	**Beta-428992 : 11662-5/50270**
Conventional radiocarbon age	**3170 ± 30 BP**
Calibrated Result (95% Probability)	**Cal BC 1500 to 1405 (Cal BP 3450 to 3355)**
Intercept of radiocarbon age with calibration curve	Cal BC 1435 (Cal BP 3385)
Calibrated Result (68% Probability)	Cal BC 1495 to 1480 (Cal BP 3445 to 3430) Cal BC 1455 to 1420 (Cal BP 3405 to 3370)



Database used

INTCAL13

References

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates, Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

References to INTCAL13 database

Reimer PJ et al. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0– 50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4):1869– 1887., 2013.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • Email: beta@radiocarbon.com

暦年較正結果（No. 5）

表1　東大窪遺跡における蛍光X線分析結果

単位：wt(%)

原子No.	化学式	地点・試料　玉
12	MgO	4.025
13	Al_2O_3	27.081
14	SiO_2	50.281
15	P_2O_5	0.032
16	SO_3	0.228
19	K2O	9.503
20	CaO	0.121
22	TiO_2	3.295
23	V_2O_5	0.131
24	Cr_2O_3	1.483
25	MnO	0.060
26	Fe_2O_3	3.689
28	NiO	0.011
37	Rb_2O	0.022
39	Y_2O_3	0.003
40	ZrO_2	0.035

図　版

調査区上空から普賢岳を望む（南から）

調査区全景
航空写真

図版2

調査区北半部（北から）

調査区南半部（南から）

調査前風景

Tr. 1

Tr. 2

Tr. 3

Tr. 4

Tr. 5

Tr. 6

トレンチ掘削状況①

図版4

Tr. 7

Tr. 8

Tr. 9

Tr.10

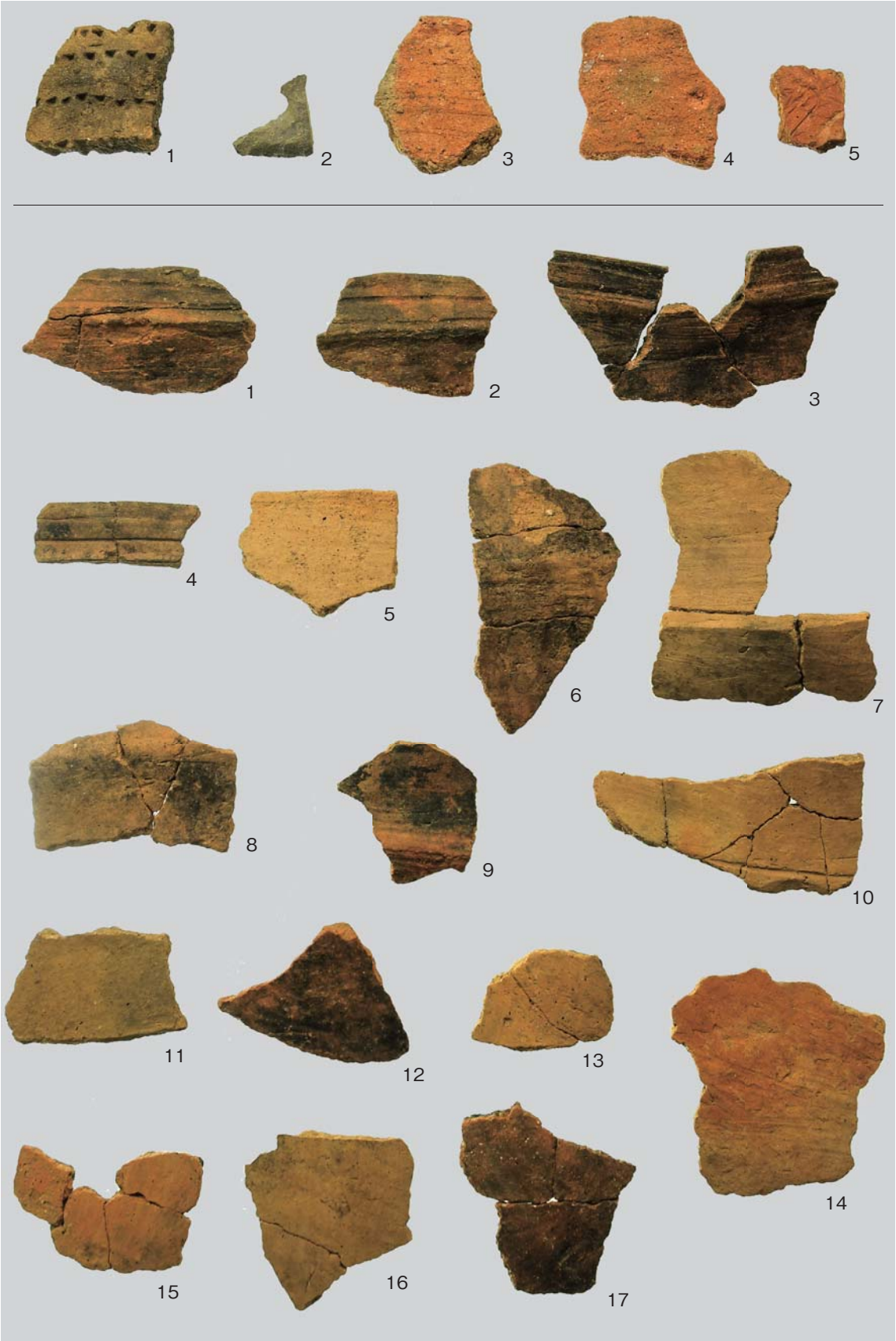
西壁土層（12区）
トレンチ掘削状況②・西壁土層

土坑1検出状況

Ⅲ層遺物出土状況（16区）

図版6

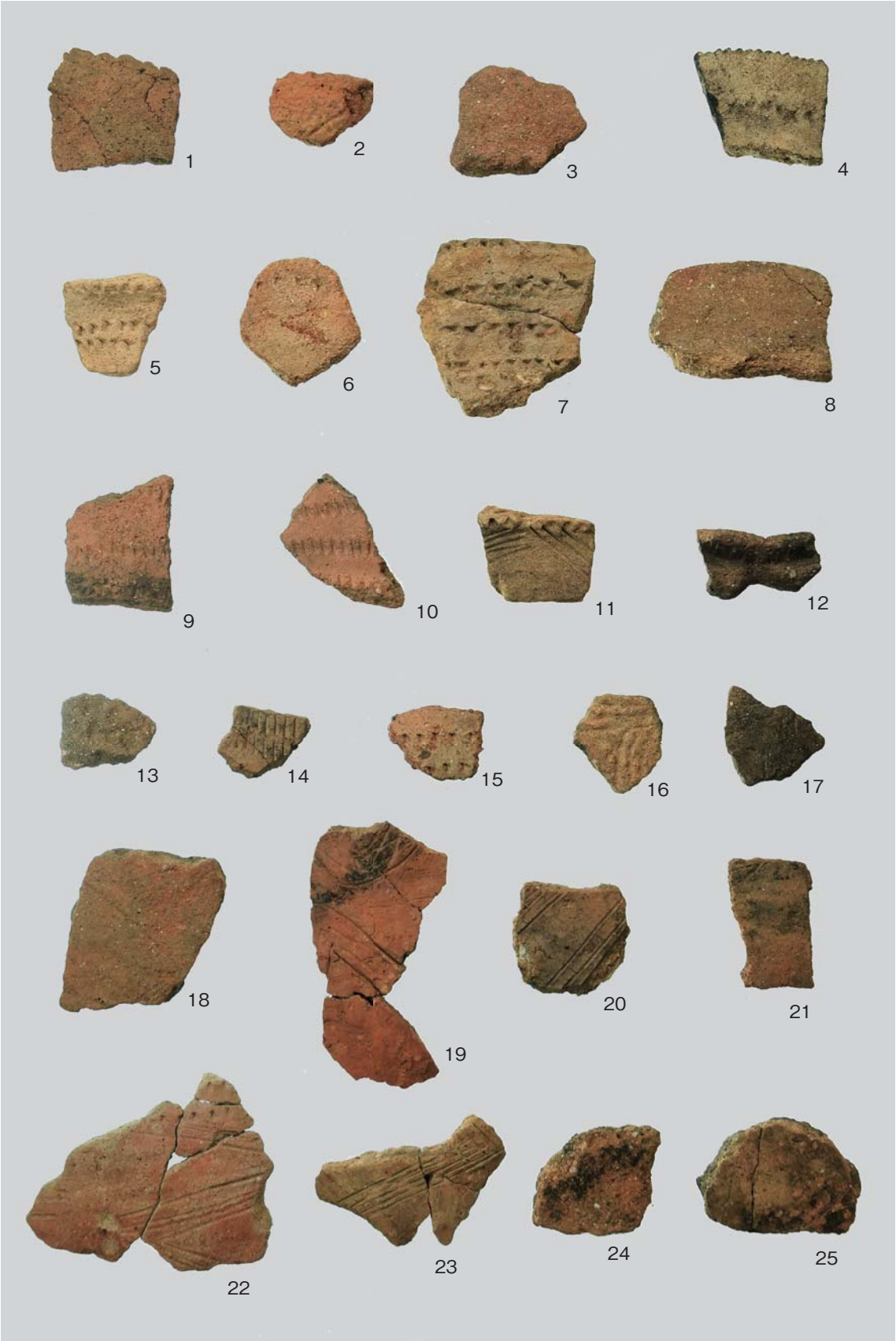
遺物出土状況・作業風景



遺構・土坑1出土遺物

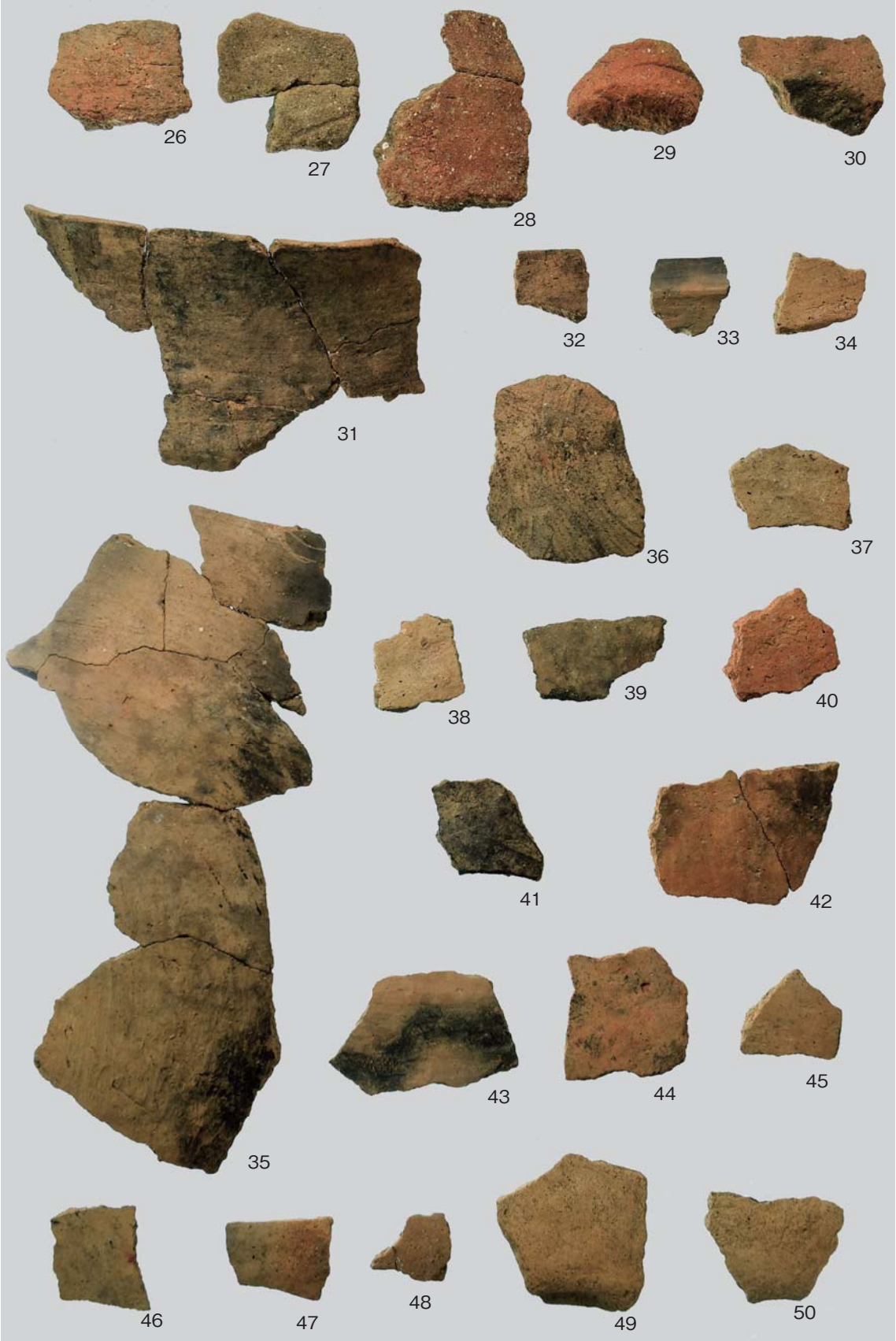
図版8

土坑1出土遺物

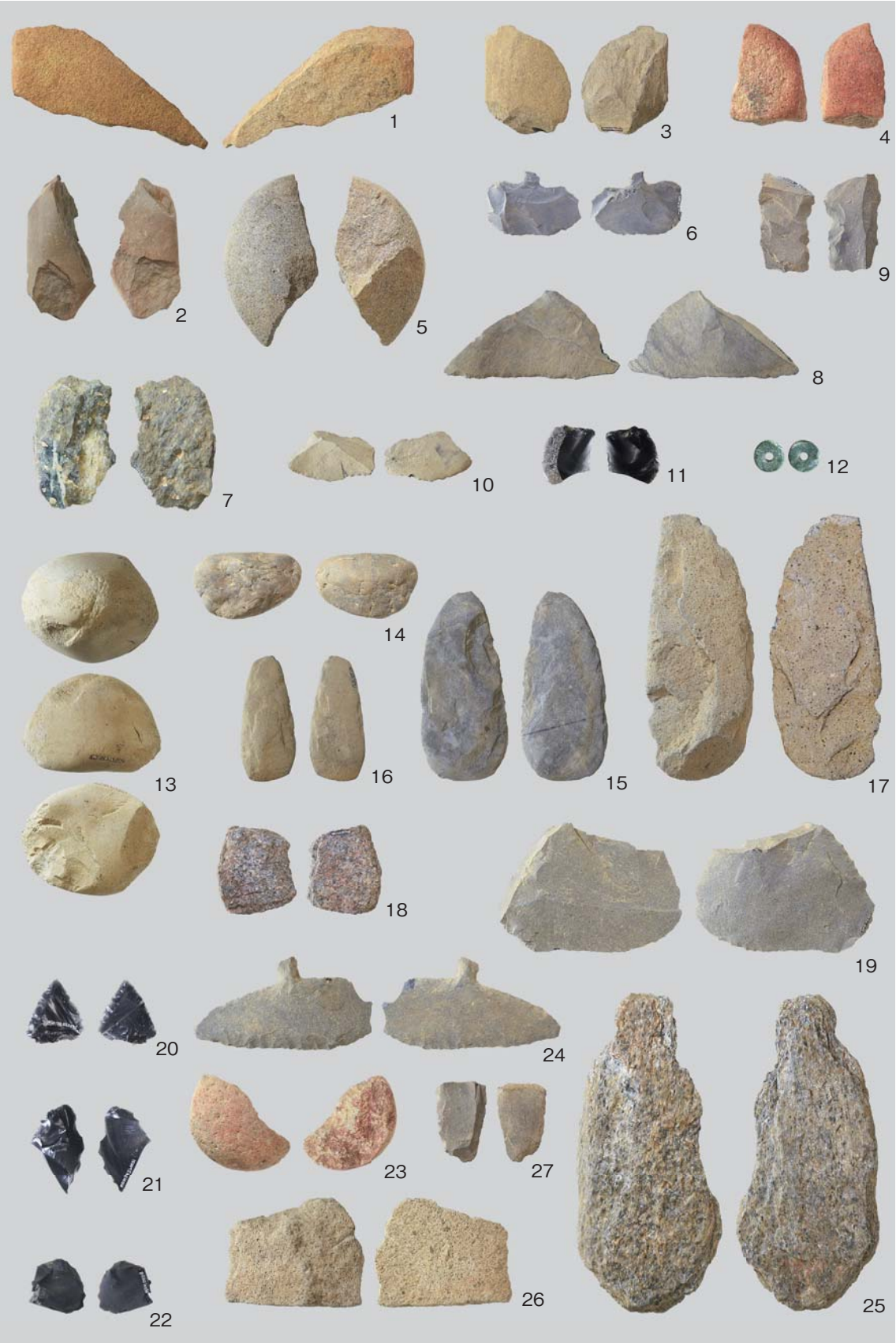


包含層出土土器①

図版10



包含層出土土器②



出土石器

報告書抄録

ふりがな	ひがしおおくぼいせき
書名	東大窪遺跡
副書名	市道古小谷線道路改良工事に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第11集
編著者名	本多　和典・酒井　希望
編集機関	南島原市教育委員会
所在地	〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地　TEL0957-73-6705
発行年月日	西暦2018年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東大窪遺跡（ひがしおおくぼ）	南島原市（みなみしまばらし） 有家町（ありえちょう） 尾上（おのうえ）	42214	65	32° 42′ 01″	130° 18′ 06″	20150420 ～ 20150623	358㎡	市道古小谷線道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東大窪遺跡	遺物包含地	縄文	土坑	土器 石器	

南島原市文化財調査報告書　第11集

東 大 窪 遺 跡

2018. 3. 31

発行　長崎県南島原市教育委員会
〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷　株式会社　昭 和 堂